と罵り騒ぐ其の中を、眞一文字に駈け來つた大奴、自身番の前に立ちはだかつての仁王立、

「ヤイ、三人の侍、俺の旦那を殺し、あまつさへ若黨さんまで殺つたのは手前達か」

「いかにも、武士の作法を存せぬ白痴者ゆゑ、手打にいたしたが、復讐したくば相手になつて得さす、支度いたせ下郎」

「なにを、支度しろ、神妙な事を吐しやあがつて、まあ急くな〳〵、緩り待つて居ろい」

と云ひながら、槍の鞘をば靜かに拂つて見た伊助、

「オヤ〳〵、如何に武に不鍛錬とは云へ此樣に赤く錆びてゐちやあ仕樣がねえな、オイ侍、今槍を研いで、土手ッ腹へ風穴を開けて呉れるから、チッと待つてゐて呉んな」

「はゝゝゝ、小氣味のいゝ奴、早く研げ井上眞改で引導渡して呉れるわ」

大奴は悠々と、玉蟲と若黨小作との死駭に向ひ、合掌して口の中、何やら深くも念じて居つたが、それも暫時、やがて自身番の手桶を持つて來て、傍にあつた瓦の破片で、ゴシ〳〵ゴシ〳〵、例の槍をば研ぎ始めた。見て居た見物の一同、

「おつ恐しい氣の長え野郎だな、併し感心だ、オイ奴、負けて呉れるな」

「大丈夫だい」

せゝら笑つて立ち上つた伊助、少し槍が白くなつたから、リユウとばかりに引きしごき、

「さあ何奴でも懸つて來い、田樂刺にして呉れるから早く出て來て勝負しろ」

と云ふより早く、懐中にした手拭をば、七分三分に引ッ裂いて、三分の方を早速の襷、紺上衣の上からキリ〳〵と懸け置いて、梵天帶を結び直し、裾たかく

と端折つて、七分に破つた手拭を、二ッに疊んで汗留鉢巻、十文字の錆槍に捩を

入れ、身構をした大奴、八方に眼を配つて突ッ立つたる武者振に、見物ワッと聲を立て、

「奴さん、頼みますぜ……」

暫時は鳴りも止まなかつた。

自身番の中より、襷鉢卷凜々として、悠々現れ出でたる一人の門弟、

「下郎よッく聞け、拙者は百人町の鬼神と呼ばれし、小野派一刀流の名人、戸田運平先生の高弟、村林八郎なるぞ、いざ來い來れ、さあ來れ」

「なにを、恐れるものか」

大上段に位を取つた村林八郎、一足下つて中段につけたる大奴、これを見るやカラ〳〵と打ち笑ひ、

「困るな、槍に向ふに上段に構る奴があるもんか、さう狼狽てずに向つて來い馬鹿野郎奴、手前劍術つかひちやあねえな、引つ込んでゐろ〳〵、大切に使へ

ば生涯ある體だ、無益に棄てることもあるめえから、まあ〳〵先生を出せ、望む相手は其奴一人だ」

云はれた村林八郎、ハッと思つて此度はピタリ青眼に構へながら、

「無禮者めッ」

とばかり、ヤ、ヤーと暫時氣合を計つてをつた兩人、村林の體に隙があつたか

「往くぞ……エイッ……」

と繰り出す奴の槍の至妙に、一上一下入り亂れて、チヤン〳〵チヤリーン、火花を散らして戰つたが、何を云ふにも此方は伊助、近江の琵琶湖で、水中の魚をも突かふと云ふ手練の早業だから、哀れなるかな村林八郎、奴が爲めに見事胸板突き貫かれて、後へに撞と倒れて了つた。

見物が我を忘れて喝采たてる中に、現れたのは村林の兄弟子、杉山丈左衞門といふ男、見物の喝采聲を苦々しくも聞き流しつゝ、

「さあ來い奴」
「なにを小癪な」
「さあ來い、いゝざ」
「なにを」
互に秘術を盡して、暫時が程の間、戰つたが、勝負は見えなかつた、大奴は心の中、
「此奴は前のより強いぞ、一番瞞着してやらん」
と、次第〳〵に斬り立てられて、ジリ〳〵と坂を下さるゝ大奴、見物の群集は口々に、
「奴さん確乎頼むせ」
「負けるな奴さん」
「天下の名人が、今助太刀に出るせ、確乎しねえ」

助太刀の一言にハッと思つた丈左衞門、隙に乘じて突ッ込む錆槍、丈左衞門が喉咽ップ、リ、勢餘つて鎌にかけられ、首は後に消し飛んだ、所へ柄杓に浪々と水を湛へて、持ち來つたのは、部屋頭の吉藏だ、
「伊助、さあ水でも飲んで、一息入れるが宜い、まあ宜かつた、二人まで仕留めて、俺あ先刻から心配して、此の通り冷汗をかいて仕舞つた、今度のは手剛いぞ、氣を附けて呉んな、頼むせ伊助、いゝかえ、え、伊助、此の刀あ、此の後のお侍樣がお前に貸すと仰しやるから、用心に差して出ねえ」
「さうかい、そいつは有難うごぜえます」
水もそこ〳〵、息をも續がせず、戸田運平は身拵へ嚴しく、
「拙者が戸田運平であるぞ、可憫ながら息の根止めて呉りやう、さあ來れ」
「望む所だ、いざ來い運平」
やつと叫んで立ち上つたが、流石は運平、一流の奥儀を極めたゞけ、兎の毛の

隙もなかつた、互に取つた相中段、突き入らんか、出沒自在の變化あつて、槍の敗けともならう、斬り込まんか、神變不測の秘術あつて、劔の敗るゝ緒ともならう、たゞの目には、何、石山の秋の月であらうが、此所が互に苦しい所、汗浚々と流れて、呼吸いよ〳〵荒く、一死一活成敗存亡、まつこと微塵の氣息のうちに決せらるゝ、いはゞ生死一秒の危機一髪と迫つて見る〳〵兩人の顏色は蒼白になつて了つた、驚いたのは部屋頭の吉藏である、こりや捨てゝは置けぬとあつて、手近の小石を取るより早く、發止、運平を目掛けて投げ附けた、其の狙ひは誤たず、小石は飛んで運平の眉間よりサッと迸つた血汐に、アッと云つて撓む所を、得たりと踏ん込み〳〵突出した錆槍、運平が片手打に拂つた白刃一閃、アッ危險ない〳〵大奴の槍は、しほ首から斬り落された一瞬間、手元に殘つた柄をば投げつけざま、一刀ギラリ、斬り込んだ大奴、受け流した運平、チャン〳〵チャリ、ーン。

手負猪の戸田運平、もう是までと思つたか、捨鉢うつて斬り込む尖頭、次第次第に斬り立てられる大奴、最前より息をも續かず、三人に渡り合つて、疲れて居るから堪らない、泥に滑つて仰向ざまに、ヅル〳〵揑と顚倒つた、占めたぞ茲だとばかり、大上段に振り被つた運平の拜み打ち、あゝ大奴は眞ッ二ッ、折から飛び來つた第二の礫は、幸か不平か運平の鼻柱をしたゝかにも發止當つたので、思はずタヂ〳〵タヂッと後へ下つて、揑とついたる大尻餅、

めしやの注進に、馬を飛ばして鐵砲洲の藩邸より、鞭音高くも乘り込み來つた二騎の武士、太刀の柄に手を懸けながら口々に、

「氣を確かにせい槍持ち伊助、武林唯七が助太刀に參つたるぞ」

「立ち上らんか玉蟲の槍持ち、堀部安兵衞これに控え居るぞよ」

大奴の勇氣は十倍して、起き上りざま斬り込む鋭き尖頭に、運平は坂の上へヂリ〳〵ッと追ひ上げられたが運の盡、玉蟲の死骸の踵に躓いて、思はずヨロ〳〵ッ

と腰の碎けた所を、飛び込んで横なぐり、サックリ腰の番を斬ッ放して、二の太刀は早くも運平が素首に小氣味よくも當つたので、脆くも此所に息絶えた。大奴は首尾よく三人を仕留め、止めを刺せばもう氣が弛んで、大地へペッたり座つて了つた。

扨も其の後、この大奴こと仲間伊助は、敵討の筋道相解つて、忠義な奴よとの評判高く、破格の恩典を賜つて茲に十石三人扶持、姓も前原名は伊助、諱を宗房と名乗つて士分、淺野内匠頭が家臣の一人となつたが、時恰も元祿十四年三月十四日、伊助が三十八歳の時に及んで主家の凶變、茲ぞ日頃の恩返しと、決心の臍を固めた前原伊助宗房は、逸早くも一黨の誓に加はつて、東奔西馳、大いに盡すところあつた。越えて翌十五年の春、大石内藏介良雄は、一方に吉田忠左衞門を先づ江戸に下して、同志の統督に任じたが、他方には又同方面に對し特別任務の士を要することゝなつたので、撰び出されたのが神崎與五郎と此の前原伊助と

の兩人、そこで、伊助は其の年四月中江戸へ下つて、敵吉良家に最も近い所に家を求め、本所二ッ目相生町三丁目に、米屋五兵衞と稱して店を開き行賈と居商とを兼て、呉服太物を商つた、勿論、屋號が米屋と云ふからには、店に米はある、併し米ばかりとは限らぬ、雜穀乃至野菜果物、又少ないながらも、呉服絲類、小間物類などをも、ズラリ店先に並べた所謂何でも屋だ。かうして一つには、出來るだけ吉良家々中の女共を其の店に引きつけ、又一つには、自身邸の長屋などに入り込んで、敵情を探索せんが爲めに隨分と苦心したのであつた。果せる哉、其の苦心は空しからず、探り出した機密の報告は着々一擧の勃發に與つて、其の歩を進ましめたのであつた、で、其の店には、倉橋傳介の十左衞門が番頭、岡野金右衞門の九十郎が若い衆となつて、チョコナンと控えて居るといふ風で、一店こぞつて商賣かたぎ、主人の五兵衞たる伊助は、朝まだきより呉服絲類を引ッかついで、華客廻をすれば、小豆屋善兵衞たる神崎與五郎は、鬢附油や櫛元結なんぞ

を脊負つて、家を飛び出す、後には番頭の十左衞門と、若い衆の九十郎、此の二人が出來るだけの愛嬌を振り蒔いて、拔目なく寄り集うお客に接するので、店は日毎の大繁昌、吉良の女中共はえいえいとう〳〵押し懸ける始末、是を機に油斷のない九十郎、いつの間にか、同家々中の召使女と、慇懃を通じて、少なからず味方の便宜を得たといふのも、實に此の時分の出來事であつた。それから、此の店のも一ッ變つて居た事は、主人と云はず番頭と云はず、店の誰彼が、直々屋根へ上ることであつた、空が曇つて來たと云つては屋根へ飛び上る、風が吹いたと云つては火の見へ這ひ昇ると云ふ風に、一日に何度となく屋根へ出る、それが一人か二人ならいざ知らず其の都度家中殘らずが屋根へ飛び出す、店も何もほつたらかして登るのであつた、そして屋根へ出て何うするのかと云へば、何にもすることはない、たゞキョロ〳〵眼で、何處かを見廻して居るのみだ、何處か……其の何處か〻、卽ち彼等の見所だつたのだ、何處かとは他所でもない、吉良の邸內

であつたのだ。かうして伊助を初め、其の他の諸士は、一意專心、復讐の時機を窺つて居たのである、それがため、成るだけ客を他處へ外らさぬやう〳〵と計つて、品物なども、損をして賣るほどに骨を折つて居たのであつた。

一說には、此の前原伊助も夜蕎麥賣りとなつて、夜になると、本所の相生町、綠町、橫網一ッ目、二ッ目邊、卽ち吉良の屋敷周圍を賣り步いて居つたといふ、で屋號を當屋と云つて、每晚チリン〳〵やつてゐる中に、或る晚のこと、最早九ッ近くなつた頃ほひ、平生の通り、相生町へ差懸つて來ると、

「オイ、蕎麥屋……」

「ハイ」

「もつと此方へ、重箱を擔ぎ込みな」

そこで伊助が、重箱を持つて、門の潛りから擔ぎ込むと、十二三人の同勢が、蕎麥の注文、食つて了ふと、

「又明日の晩來て呉れ」

と云ふので、翌晩も來ると賣れて了ふ。

伊助は心中に、此處は何者の住居だらうと、思つてよく〳〵氣を注けて見ると、此の家は槍術指南所で、俵星玄蕃と云ふ寶藏院流の大先生、舊は紀州和歌山の家來であつたが、仔細あつて浪人をなし、此處へ道場を開いて居るのだと分つたが、或る夜のこと、俵星は蕎麥を澤山食つて、

「どうも腹の工合が惡うていかん」

と云ひながら、槍をしごいて、土俵を槍玉に上げた、それが又、非常に見事だつたので見て居た伊助、豪いもんぢやと心中に感服をなし、何とか口實の下に其の弟子といふことになつて、晝は槍の稽古、夜は蕎麥を商ひ、表向は唯江州彦根の浪人井上伊助と申す者であるが、故あつて主家へ歸參の適はぬ所から、斯く夜蕎麥賣をしてゐると云つて、一日も缺かさず槍術の練磨。ところが十五年の十二

月中旬頃、伊助が玄蕃の家へ來つて見ると、師匠の玄蕃は目を閉つて茫然として居る樣子、

「先生、如何なすつておざりまするかな」

「オヽ、こりやあ誰かと思つたら、伊助殿か、イヤ、酷い目に遇つておざるよ大勢やつて來て、散々食倒して往つたなり、拙者を置き去りにして何處へか雲隱れを極めこんでの、はゝゝゝゝ、私や三四日斷食して居るやうな有樣ぢやして何か用事でもおざつてかの」

「イヤ、別段に用事もおざりませぬが、それは何うも知らぬ事とは云ひながら怪しからぬ目にお遇ひなされましたな、兎も角も、唯今拙者が、支度をして何なりとも、差上げれば、暫時お待ちあれ」

と突然戸外へ飛び出して、米、薪、醬油、味噌なんかを買つて來て、それから米をといだり、火を起したり、湯を沸かすやら何やらで、伊助灰ぼこりになつて

飯の支度を整へ、

「サア、先生召上つたら如何で……」

と御馳走をした。そこで種々と話の末、

「實は過日、松坂町の吉良の附人で、清水一學といふ者が參つて、上杉家で尊公を三百石で召抱へたいと仰せらるゝが、何うだと云つて來たが、拙者斷つてやつたよ、そりやあ上杉家の臣になると云ふが、畢竟吉良家の附人にするのだらう、それでは迷惑の至極だ、忘れもせぬ去年の三月、殿中で上野介に刄傷を企てたとやらで、お家改易となつた淺野の家來共が、主人の敵を討たうと云ふので、近頃以つて樣々と艱難辛苦を致して居るさうな、それに拙者共が吉良家へ參れば、此の忠義な方々と、白刄を交へねばならん、拙者に於ては、其のやうな汚れた槍は持たん、拙者が武術は、拙者が身を守り、又拙者が君と仰ぐ人の馬前に働いてこそ、武士の本意と申すもの、忠義に凝つたる武士を、相手に

とつて白刄を交へるやうな、汚らはしい槍は、拙者に於て所持いたさんて、と云つて追返へしてやつた、其の代り、かうして飯を食はずに居つたのぢや、併し拙者とて、いつ〳〵までも斯うやつても居られまいによつて、其の内には好い主取りでも致したなら、貴公にも今日の恩返しに、屹度取もつて上るて、アッハッ……」

と酒の機嫌で一口話された。此の時心中に涙を飲みこんだ伊助、實に辱けない今此の人を敵に廻したなら、例へ味方の面々が命を的に、打つて懸つたからとて、容易くは望を果し得ぬは明なこと、それを今の話では、蔭ながら一黨の者達に心を添へらるゝ其の心懸、實に天晴れなものよと、手こそ合さね心の中では、何偏拜んだか知れない。

話もそこ〳〵にして、宙を飛んで内藏介の許へ駈けつけた伊助、斯々の次第と玄蕃のことを話したので、内藏介も大きに感服して、早速木村岡右衞門をば、加

州の家來横山近右衞門と僞つて、金子若干と共に、加州の家臣に召抱えたき旨を告げて、玄蕃の足留をして終つた。そこで一同安心をして、其の月十四日の晩、一黨悉く打ち揃うて吉良家へ亂入、殊に前原伊助宗房は、上杉家の附人間瀨喜右衞門を槍玉に上げ、續いて四天王の一人鳥居利右衞門をも見事に突き伏せて、目も醒むるやうな大働き、斯くして一同首尾よく本望を遂げ翌十五日の曉暗を破つて、靜々と兩國橋の袂まで引き揚げ來つたる時、見物の群集に立ち交つて居つた俵星玄蕃、一黨の姿を一見するや、思はず扇を開いて、

「アナ、勇ましの其の姿、天晴れ由々しき武者振りよ」

と我を忘れて賞め立つた。この聲に、氣が附いた前原伊助、

「アイヤ、これは俵星の先生でおざるか、是まで姓名を僞はり居つたる段、誠に相濟まざる次第ではおざるが、實は拙者事は、舊播州赤穗の城主淺野内匠頭長矩の臣、前原伊助宗房と申す者でおざる、御蔭を以て昨夜は充分の働をいた

し、人並の忠義を盡し得ておざる、是も皆、先生の御蔭……」

皆まで云はせず、嬉し涙に目を曇した俵星玄蕃、伊助が六尺三寸穗の槍を抱いた天晴れ健氣な其の樣に、ホロリと一滴こぼしながら、

「オヽ、伊助殿、さては左樣でおざつたか、知らぬことゝは云ひながら、今まで失禮の段、御許し下されい、拙者とても、貴殿が此度の御本懷を、首尾よく遂げられたと承つては、人事とは思はれず、我身ながら不思議なほど、嬉しくも亦喜ばしう存じておざる」

と、欣然たる其の有樣、此の時内藏介も來つて、僞の次第を更めて謝しながら、伊助に槍術指南の一事を厚く禮を述べて、右と左へ分れたが、此の後玄蕃も紀州家へ歸參が能ひ其の節伊助から紀念にとて、渡された短冊と襟なる呼子の笛とを永く大切に保存したといふ事である。それは兎に角、泉岳寺に引き揚げた前原伊加宗房は、一同と共に翌元祿の十六年二月四日、切腹仰せ付けられて、惜しや三

十九歳を現世の名殘、あえなくも朝の露と消え失せて、徒らに、

及補天劍信士

の文字のみ、苔むす墓石の其の上に、春風秋雨茲に幾歳、忠義の名と共に毅然として今猶伊助が昔を語りつゝある。

岡島八十右衛門常樹

岡島八十右衛門常樹は、原惣右衛門の實弟で、夙に岡島家の養子となり、其の家系を襲うて二十石五人扶持を食み、故内匠頭に仕へて、中小姓兼勘定方を勤めて居た。彼は人となり、剛直にして無双の大力、武邊も逞しく又仁愛の心深き一廉の武士であつた。それで十四年の三月十四日、主家の凶變發するや、首として兄惣右衛門と義盟に就き、倶に共に何處までも正と義とを踏み行かんと主張した内藏助は、早くより彼が公正なるの性を見透して居たので、開城前に藩札引換を

奉行させ、又藩庫金の分配をも擔當せしめた、此の分配の席上で、例の憎まれものゝ大野九郎兵衛が自分の豫期して居たよりも配金の少ないのに劫を煮やし、折柄八十右衛門所管の札座の役人中に、藩札引換のために預けられあつたる金を引攫んで逃げた者あつたにかこつけて、

「金を引浚つて逃げたは小役人共ばかりでもあるまい、奉行も同じ穴の狐だらう」

と、衆人の面前で惡口した。八十右衛門是を耳にするや、烈火の如くに憤激して、

「籠城と聞けば腰を拔かし、あまつさへ一藩の士氣までを沮み、分配といへば所得を爭うて私儀を逞うする、彼奴眞の祿盜人でありながら、人に賊名を被せるとは不埒千萬にも程がある、苟も武士たるものが、斯かる汚名をつけられてやはか引込んで居られうか、好し此の上は彼奴が白髮頭を打切つて呉れん」

と、其の日の勤めを終るや直ちに九郎兵衛が宅へと押掛けて、大野が如き奴原に刀脇差は無益、是にて成敗してやらんと、金箱を掻き廻すに用ゐた斤量の棹を突き鳴しながら、

「岡島八十右衛門、御尋ね申し度き事おざつて參上いたした、是非に御主人に御面會いたしたい」

と破鐘聲で案内を乞ふた、是に扨はと感づいた九郎兵衛、それは大變だと體よく留守を遣はせた。

「さらば後刻」

といひ棄てゝ立去つたかと思ふと又もや來て、

「拙者、今宵來つたのは亡君の重用でおざる程に、大野殿歸宅せられなば早速お知らせ下されい」

といひ放つて行た。九郎兵衛ホット一息ついて、胸なで下してゐる中に暫くする

と、八十右衛門再び來ッて、

「頼む」

「お留守」

「よし、さらば……」

歸つたかと思ふ間もなく、三度大音に、

「頼む〳〵」

サア九郎兵衛弱つてしまひ、何うしたら宜からうと彼方へウロ〳〵此方へウロ〳〵、八十右衛門もさう〳〵は留守の手に乗らぬ、取りつがねば構はぬ、奥へ押込んで九郎兵衛が白髪首打ち落して呉れんと思ふから、

「頼む〳〵」

の連發、流石の九郎兵衛も今は蒼くなつて又々留守を遣はせた。八十右衛門も偽だとは承知したが、斯くまで留守を使つて自分に面會せぬやうな臆病未練の九

郎兵衛、可哀さうだ助けてやれと思つたか、突然雷のやうな聲を揚げて、

「イヤ、他出とは眞赤な謊であらう、其の實はそんじよ其處らに隱れ居るに違ひはあるまい、耳を澄して我が言ふ所を能く聞け拙者は恭けなくも、君候の祿を食んで妻子從者を養へるもの、依つて今一命を君下に捧げて死を決し居るのである、然るに今日城中に於て、大野拙者を盗人と申せしこと今その實否を糺さんため參つてあるが、斯く他出と僞つて出會はざる卑怯千萬の擧動この期に及んで逃げ隱れるとは何事だ、尋常に出でゝ拙者に對面いたせ、武士たるものが畜生を切るの刀は持たぬが、手頃の棒は持參し來つたぞ」

散々に罵つたけれども矢張り命が惜しいと見えて、九郎兵衛グウの音も出さない。そこで八十右衛門も、是しきの奴を打つ放すに何も今日ばかりとは限るまいと、悠々其の場を引き上げた。虎口を逃がれてホット一息した九郎兵衛は、愚圖〳〵して此處に居やうものなら、又何時八十右衛門が來るかも知れんと早速家財

道具を取り纒めて、自分は直ぐさま女乘物を用意させ、之に乘つて偸むが如く、其の夜の中に後白浪、八十右衛門は何處までも大剛の士であつた。

是れより先のことではあるが、八十右衛門が斯く九郎兵衛を走らした原因がある、其の國庫金分配のことは確かに一因ではあるが、其の前に九郎兵衛が八十右衛門を滿座の中で耻しめたことがあつた、といふのはまだ内匠頭在世の時分、一年内藏介が自宅で觀月の宴を張つたことがあつた、所謂家中の諸士を集めて懇親會といつたやうなもの、其の席上で九郎兵衛が腰のものゝ鑑定をした、處が八十右衛門は元から餘り豐かでなかつた爲め、鈍刀といふ譯ではないが、處々にポツ〳〵と錆びが浮いて、拵へも粗末なものであつた刀を差して居たので、九郎兵衛が滿座の中で惡口をした、

「大平無事は有難いもの、しかし戰場修羅の巷では、この錆刀で殿の御馬前に功を立てやうとは迚も適はぬ願ひ、一體岡島氏は平生忠義〳〵と口にせられる

人であるに、今斯様な刀を所持さるゝところを以て見れば、大概貴殿の御心中も知れて居るて、兎に角、この席に他藩の者は居ないから宜しいとはいふものの、若し他藩の者が居たならば、淺野家の武士にして、身分も輕からぬ岡島八十右衞門といふ者は、錆びたる鈍刀を差して居る、して見ると淺野の武道も衰へたものだと、世間の批難を蒙つてはお家の耻辱、同藩の誼に大野九郎兵衞、如何やうにも金子は用立てるほどに、せめて人に笑はれぬやうな刀を持つしやい、刀は武士の魂、鏡は婦人の魂、これを折〳〵磨いて錆びさせぬやうにするこそ、各の〳〵心掛といふべきもの、斯様なものを帶へ居られては、貴殿が平常中されるお言葉とは、チト相違して居るかと拙者は存ずる」

と人もなげなる耻辱を與へた。八十右衞門は一時はムッとしたが、イヤ〳〵私の怒りに事を起しては主君へ何の面があつて見えられうぞ、茲は勘忍して耐へべき所であると、強いて怒りを苦笑にまぎらし、

「大きに赤面の至り、爾來心掛けて好き刀を求め、その時改めて御鑑定を願ふでござる」

と、其の場は體よく席を取繕ひ、耻辱を耻辱と思はずして我が家へ立歸つた。

しかし流石に氣持が好くない、如何に身貧なればとてあまりといへば九郎兵衞が滿座の中での惡口憎言、あゝ貪ほど辛いものはないと、思はず緣端に出て見ると、ゴツン〳〵といふ物音、ハテナと目を上げると、向ふの垣根外にある井戸端に盥を置いて、それに水を湛へ、中に荒砥を一挺置いて、今年十九になる下郎の直助、向ふ鉢卷兩肌ぬぎ、錆びた脇差のコミを手拭で卷いて、荒砥に當がひゴリ〳〵磨いて居る。八十右衞門是の樣子を見て、

「ハテ、妙なことをいたして居るな、ハ、ア今日拙者が滿座の中で錆刀を大野九郎兵衞に見られて、悉く〳〵拙者が嘲弄されたのを聞き知り、それゆゑに拙者が遺はした脇差の中身の錆を落して居るか、野猴のやうな心を持つて居る奴ぢや

下郎が錆たる脇差を持つたればとて、何の耻ることがあらう、笑うに堪へたる奴ぢやわい」

と八十右衞門心に思ひながら、猶も様子を見て居ると、直助何か獨言をクドクトといつて居る、八十右衞門想はず聞耳引立つて是を聞くともなしに聞くと、

「主恥しめらるれば臣死すとは古人の金言だ、今日旦那様の腰の物について大野が讒謗、たとひ下郎といへども主従といふ名義のある以上は、何の面目あつて此の儘に濟まされやう、旦那様は御身分が御大事故、何事も御勘忍しちや居られるが、俺のやうな吹けば飛ぶやうな三文奴、旦那様に今日お暇を頂き、主従の關係を絶つて、あの九郎兵衞の野郎が屋敷に乗込み、禿頭を叩斬つて其の場で俺も命を棄て、旦那様の耻辱を霽さにや置くものか」永過る獨言だ？。

とゴリ〳〵ゴリ〳〵力に任せて錆を落して居る。聞いて驚いた八十右衞門、ッ力〳〵ッと直助が側へ立寄つて、

「コレ、何をいたす」

「ヘイ」

振返つて見ると主人の八十右衞門だから、

「これは旦那様、何か御用で」

「イヤ、何も用ではないが、其の方一體何をいたして居るのぢや」

「ハイ何もいたしません」

「何もせんといふが、手前その脇差の錆を落して何うする積りだ」

「何にもいたす心得ではございません、たゞ餘り錆びましたので、それを落して居るだけで」

「イヤさうではあるまい、今日大石大夫の屋敷に於いて觀月の宴會、その席上で我等が腰の物を大野九郎兵衞が、鈍刀の錆びのと笑ふたのを、聞きもし見もしての故であらうがな、今たとへ其の方が大野の屋敷に斬込んで、萬が一九郎

兵衛に傷でもつけんか、岡島八十右衛門は下郎を煽動して耻辱を霽らしたの、宿意をはらしたのといへばます〳〵耻の上塗、又其の方の腕にて、なか〳〵九郎兵衛に刄向ひ立てなど到底なし得るものではない、却つて岡島の下郎は亂心いたしたと、其の場で刀試しになる位のこと、さ、勘忍のなる勘忍は誰もする、ならぬ勘忍するが勘忍、ちと無理のやうではあるけれど、この勘忍も我身を思ふた譯のみではない、主君の御爲め、御奉公をする間は私の命にして私の命でない、同輩の無禮を怒り、其の場で刄傷すれば此の命もなくなるは固よりのこと、主君の爲めに命を棄てず、勝手我儘に棄てたならば、是をこそ眞に祿盜人といふものだ、たとへ今耻辱を受けた處で、又何時かそれを雪ぐ時もあらうほどに決して左樣なことはいたすものでない、其の方が拙者の身を思うて呉れる段は、八十右衛門身にしみて嬉しくはあるが、此處はよく〳〵考へて思ひ止まれよ」

と、涙を流しての意見に、直助も成る程と心に合點したものか、是も同じく涙と共に、

「恐れ入りましてございます、前後の考へもなく申譯もございません、どうか御勘辨を願ひます」

「イヤ、手前の志、忝けなく思ふぞ、主なればこそ、家來なればこそ、其の誼を捨てずして拙者が耻辱を雪がうといふ志、誠に過分ではあるけれど、しかし心得違をいたしては相成らんぞ」

と、八十右衛門は直助によく〳〵意見を加へられた。直助は自分の部屋に戻つて、

「ア、飛んだことをした、もう些とで旦那樣の耻辱の上塗をするところであつた、今の旦那樣の御意見によつて、大きに俺も赤面をした、併し俺の旦那の御氣性では、お金をお溜めなさることなどは必ず出來ない御自分の餘れるものは

人に施し、又御城下の難義をして居る者をお救ひ遊ばすなどゝいふ迚も金子を五十兩百兩とはお蓄への出來ない御氣性だ、何うかして旦那樣の御無念を霽したいものだ、一層旦那樣にお暇を頂いて、京か大坂邊の町方に奉公をして、五年七年の間一生懸命稼いで給金をため、切めて五十兩と六十兩となつたならばどうか旦那樣に大小を求めて上げて、萬分が一の御恩に報いたい」

と斯う決心をした。

この直助といふものは、もと御城下の片町といふ所に住んで居つた八百屋甚兵衛といふものゝ子で、五歳の時母親に死なれて、出商賣の甚兵衛が、その子の手を引いて、城下先の得意廻りをする、八十右衛門は未だ當時年が若かつたので、或る日のこと、

「甚兵衛、貴樣女房に死なれて困るだらう」

「ヘイ、十分にお得意樣を廻ることも、此の子を連れましては出來ませず誠に

困切つて居りまする」

「ウム、左樣であらう、見れば男の子のやうだが、何といふ名前だ」

「ヘエ、直助と申します」

「さうか、なか〳〵愛嬌のある子僧だ、サア菓子をやる、此處へ來い〳〵」

といつて、八十右衛門自分の居間へ連れて來ては菓子などをやるので、終ひには、甚兵衛と一緒に歸るのを嫌がつて、八十右衛門の傍を離れず、

「サアお暇をいたゞいて、俺が此の荷の中に入れて連れて歸るから早く來い」

と、甚兵衛がいつても、御新造や八十右衛門の後ろに隱れて泣いてゐる。

「可哀想だ、甚兵衛置いて行け」

「どうも恐れ入ります、折角の思召は有難く心得ますが、此方樣に置きまして

も御厄介でございませう」

と連れて行かふとしても、甚兵衛の許へ歸らない、八十右衛門も是を見て猶更

哀れに思ひ、

「當分小僧に置いてやるから、決して其の方遠慮なく此家へ預けて置け、次第によつたら拙者が育てゝ遣はすから」

「ヘエ、有難う存じます」

といつて、甚兵衛は喜んで歸つた、その後甚兵衛、不幸に不幸が重なつて、折節流行病のために不圖床について、二三日煩つたかと思ふ中にポックリ死去つたので、今は此の直助一人となり、八十右衛門も其處でこれをば自分の家に置いて讀書の一通りから劍術の一手ぐらゐ、何から何まで人普通の事は殘る處なく敎へてやつた。斯ういふ次第であつたから、親とも主とも譬へ方なき恩を受けた直助、十五の時から下郎となつて、女中の代りから使走り、何によらず自分が一身に引受け、朝は暗い內に起き、又夜は遲くまで草鞋を作つて內職をなし給金などゝはテンから頭に置かずしてコマ〳〵と働く、といつたやうな譯であるから、普通の

人いれから奉公に來た下郎とは事が違ふ、一意に主人の無念を霽したい、迚も願つたところが暇は出ないこゝは置手紙を殘し、この地を出奔して大坂に行き、年限通りに歸國して、旦那樣に御恩を報いやうと、直助心の中に深くも決心を固め、遂に書置を一通認め、研立てた彼の脇差を腰に打込み、管の小笠に國所から名まで書き、その夜の中に赤穗を出奔に及んだ。此方は然うと知らぬ八十右衛門夫婦、夜が明けても直助が出て來ぬ、呼んでも返事がない、合點行かじと思つた八十右衛門、直助が居間へと來て見ると、中は綺麗に片附けられて、柱に何やら手紙やうのものが貼附けてある、一寸見ると旦那樣へ直助と認めてある、取上げて開けば、此の度思ふ筋あつて向ふ七ヶ年、お暇を頂きたい、其の節は必ず再び立歸つて萬分の一の御恩を報いる所存、何分ともに宜しく御勘辨を願ひたいとの意味、

「ハテ不思議ぢや、向ふ七ヶ年の暇乞ひ、これは矢張り昨日の一條からの義で

あらう、しかし敢て心得違ひでもなさゝうな樣子、何か望みが一つ出來て此の地を去つたのであらう、一寸の蟲にも五分の魂、眞逆牛馬に踏まるゝ氣遣ひもあるまい、もう彼も十九だ、さしたる心配もなからう」

と、その書面を持つて自分が居間へ戻り、連合の人にこの話をした。すると流石は女のこと、早くも涙を浮べて、

「幼少から育てゝ見れば我が子も同樣、東西しらぬ世間見ずが他人の中に出てどんな難義をせまいものでもない、貴郎追手をおかけなされては」

「さ、それが何方へ行つたか方角も分らんものを、追手をかけたとて無益のこと、又幸ひに引戻したとて、彼が折角の志を無にするも不憫の至り、何も彼が居ぬからとて不自由はせぬから」

と、事は其の儘になつたが、此方は直助、日ならず大坂に出でゝ木屋伊兵衛といふ旅籠屋に宿を取つて、さて身の振方を是々斯々の次第だが何うしたものかと

伊兵衛に相談しかけた。

「なるほど、左樣でございまするか、して何處かに御奉公住がなさりたいとの思召で……」

「左樣でございます、何分どうかお世話を願ひたうございます」

「宜しうございます、しかし失禮なことをいふやうでございますが、それはお止しなすつた方が宜しい、お世話をする分にやア差支ないが、奉公人の世話をするには請判といふものをするので、第一その判を捺く譯には行きません、といふのは金請に立つとも人請には立つなといふ譬さへありまするくらゐ、此處は繁昌な土地ゆゑ、人間が皆惡喧くつて不人情、田舍の衆とはまた大きに事柄が違つて、他國の人の世話をした日には、生涯かゝつても世話がしきれない位なもの、それを金が地面に落ちて居るやうなことゝ思つて、田舍の衆たちは出て來なさるが、イヤ中々そんな譯のものではございません、次第によると一生

涯、雇人で身を終つたり、又ボン引などの手にかゝると二進も三進も行かなくなつてしまひます、そんな時になつて後悔したつて先に立ちません、それより親御様から讓られた田地田畑を守つて居るとか、或は其の職業を慎んで守つて居なさる方がお爲めでございます、此處では見物だけをなされて、足を止めて御奉公をしやうなぞといふ御料見は、お止めになつた方が宜しうございませう」

と、いと親切な異見、直助も是を聞いて、強つて賴みもなり難く、

「それでは其處らを見物して來ませう」

と、宿をブラリと外に出て、何處とてもなく見物して歩く。すると丁度天滿の町へ差掛つて來ると、トツテンカン〳〵と鍛冶屋の鎚音、見ると向ふに細工場があつて、その細工場の口に人が黒山のやうに立つて居る、玄關構へで、しかも高張が點いて、入口に津田越前守助廣といふ表札が打つてある。武家に奉公して居

るだけに直助が、

「ア、これが津田越前守助廣といふ、當時新刀正宗といふ評判の刀鍛冶、大坂の刀鍛冶では井上眞海と津田助廣の兩人だといふが、其の中にも助廣の方が一段上だといふことを聞いて居る、これは町家に奉公するよりも、この人の弟子になつて、好い刀を鍛へ、それを旦那樣に差上げた方が近道だ」

と、思はず前の人を搔き分け〳〵出て見ると、助廣が正面に直つて、脇鎚を打つ者が兩人、今し汗シン〳〵と流して鍛へて居る、長さは二尺五六寸、打上げの鎚を入れて、助廣汗を拭ひながら一ト息入れて居る、見物は其の中に倦きたと見えて、バラ〳〵と散つて行つてしまつたが、直助一人、足を止めて猶も熱心に中を覗いて見て居る。助廣は不圖これを見て、

「お前さう何うも細工場の口を塞げて居ては困るではないか」

といふと、直助思はず頭を下げて、

「少々伺ひますが、今この大坂で新刀正宗といふ津田越前守助廣先生は貴郎でございますか」
「ア、私は助廣に違ひないが、新刀正宗なんといふ評判を取る程の者ではない」
「貴郎はさうでないか知りませんが、私は豫てさういふ評判を聞いて居ります」
「一體お前は何處だい」
「ヘエ、私は播州赤穂の者でございます」
「道理でお前の笠に播州赤穂直助としてあるが、お前は何かい、直助といふ名前かい」
「左樣でございます」
「フム、で、何處へ行かふといふんだい」
「此處へ來たのでございます」
「此處つて何處だえ」

「貴郎の所でございます」
「何の用があつて私の所に來たんだい」
「貴郎のお弟子になつて刀鍛冶になりたいと思ひまして……どうかお弟子にして下さるやうに願ひます」
「それは熱心だといふなら、隨分弟子にしまいものでもないが、私が弟子になるにはなるやうに請人といふものがなければならん」
「左樣でございます、貴郎の方に請人に立つ人が……」
「冗談いつちやアいかん、置く方で請人を立てる者があるものか」
「私は此の土地にそんな者はございません、貴郎のお弟子になりたいといふ氣でありますから、どうか彼の北野の天神樣を請人になすつて……」
「冗談を言ひなさんな、併し天神樣を請人に立てるなんていふ位なら不都合をする人間でもなからう、何にしろまア宜いわ、今夜泊めてやるからお前の身の

上でも話すが宜い、第一俺のことを新刀正宗といつて呉れたのは、商人と職人は名聞を好むものだから、さういふ肩書があれば俺も有難く思ふ、勝手元に廻つて足を洗つて上るが宜い……誰か是を連れて行つて足を洗はせ俺の部屋に連れて來い」

「サア直助どんとやら、此方へ來なさるが宜い」

と一人の弟子が直助を連れて臺所口に廻り足を洗つて上にあがりこみ、親方の座敷へと這入つた。すると助廣の女房といふのは年の頃彼れ是れ五十ばかりの女で、助廣に向ひ直助を見ながら、

「この人ですか」

「ア、是れだ」

「大層愛嬌のある人でございますねえ、お前は播州赤穂の直助とお云ひかえ」

「ヘエ、私が直助と申します、御縁あつて親方樣のお世話になりまして……」

「オイ〳〵まだ弟子にするとも、しないとも相談もしない內にお前の方で弟子になつちやア困る、年は幾つだい」

「十九でございます」

「十九か、まだ小者だな、何にしろ今夜ア二階に上つて寢て、緩くりと明日何處かに行かふと思ふなら行くが宜い、一層又お前が刀鍛冶になるといふ量見なら、見込を立つて弟子にしないものでもない、けれども斯んな荒つぽい商賣はない、寒の內に素裸體になつて業を取るんだから、お前見たやうな腰の極りのない人間には出來さうもないやうに思ふが、まア見て居るが宜い」

「ヘエ、有難う存じます」

と、其處で夕飯などを馳走に預り、二階に上つて寢た。翌の朝になると未だ夜の明けぬ中に、二階からミシ〳〵降りて來る足音がする、助廣は不圖目を醒して此の樣子を見て居ると、臺所の戸がガタピシと開いた、若い者が遊びにでも行く

のかと思つてゐると、ギシ〳〵釣瓶を手繰る音がして、ザーッ〳〵と水を浴る者がある、そして暫くの間何か願掛をして居る樣子、弟子の内には早く業を覺えて一廉の鍛冶屋になりたいと願掛をしてゐるものがあると見える、感心なものだと思つてる中に、水を浴び拜を上げて、二階へ上つて行くかと思ふと、さうしないで臺所に行つてゴツ〳〵何か探してゐる、助廣も默つて居られないから、

「誰だ」

と聲を掛ける。すると直助の聲で

「へエ、親方お早うございます」

「誰だ、直助か、早いといつて未だ夜が明けやアしない、お前今水を浴びたのは何の爲めだ」

「私の水を浴びましたのは他のことではございません、昨晩貴郎の仰しやるには、此の業は荒つぽい稼業だから、私には出來ないと仰しやいました、私も御

緣があつてお弟子になつた以上は、この業を悉皆り覺えたい、切めて向鎚とやらの腕でも宜い、私も出世をしたいといふ望みがございますから、それゆゑ實は水を浴びましたのでございます」

「フム、その心懸は感心だが、何しろまだ起きるには餘程間があるから二階へ上つて寢るが宜い」

「イエ、一ト寢入いたしました、子に臥して寅に起きる、二夕時目を休めれば宜しいものでございます、何か御用をいたしたう存じますが、何をいたして宜しいか分りません、その中女中樣が起きなさればいたしたいと存じて居ります」

「それは感心だ、それでは先門口を開けて掃除をしな、向ふ三軒兩隣もならうなら掃いて置くが宜い、掃除が濟んだら雜巾掛をしろ、それが濟んだら細工場の炭を壞すんだが、それは俺が起きたら敎へてやるから……」

「へエ有難う存じます」

と直助是から家の前を掃き、水を打つて庭の木戸を開け、其の掃除をして臺所へ行き、竈の下を焚きつけて湯が沸くと、雑巾掛をして仕舞ふ、その内に助廣が起きて來て、是を見るなり大きに感心し、細工場の隅へ行つて炭を壞すことや何かを敎へてやる、二階から降りて來た連中が、掃除が出來て居るのに驚いて、誰がしたんだらうと聞いて見ると直助が、

「ハイ私が掃除をいたしました」

「さうかい、けれどお前にばかりされちやア俺達が困る」

「イエ、これは新參者の慣でございます、どうぞ何なりと御用は私に仰せつけ下さいまするやうに……」

といつて少しも恩にかけぬ樣子、かへつて自分に用をいひつけられるのを喜んで居るから、そこで兄弟子も目をかける、助廣が段々樣子を見ると、曉烏の鳴かぬ中二階から降りて來て掃除をする、風が吹かうが雨が降らうが、雪が降らうが

少しも本人に變りはない。斯くして明くる正月元日から暮れの大三十日一年三百六十日、寒暖に狂ひはあつても、本人には少しの狂ひなく、寒の師走も暑の水無月も、沸くが如き三伏の暑き日も、嚴冬肌を劈くの寒き日も厭ひなく、月を經、年を經るに從ひ益々心を勵まして、日々細工場の掃除を懇ろにし、又仕事が始まると餘念なく親方が弟子に叱言をいふのを腹に呑込み、これは斯う、彼れはあゝと自ら心に締め括りをつけて、斯うしなければ宜けない、彼あしなければならないといふ事を、悉皆胸に疊みこんで唯一心不亂、鍛冶の道を勵んだ。

さるほどに三ケ年の星霜は夢の間の如くに過ぎ去つて、直助の技も次第に熟練、師の助廣も茲に見込みのたつたものか、始めて直助に受鎚を打たして見ると、如何にも腕の凝がなく、更に精練なる打込み工合、その調子のとゝのへる所といひ、呼吸の狂ひのない所といひ、一點の非を入るゝ隙なく打込み打下すので、助廣も大きに其の技倆の優れたのに感じ、他の弟子達の模範とする位ゐ、遂には折節、

直助が鍛へた刀を助廣が見て感じ入り、

「俺の若い時に鍛へたものと少しも違ひないから、俺の銘を鐫つて出さう」

といつて、助廣の銘を刻つて出しても、誰一人これを僞物といふ者はない、助廣は年を老つて若返つた、刀の鍛へも肉を持つて來たと、世間の噂も立つ程、そこで助廣も折角直助が骨を折つて鍛へた刀を、親方の銘を刻つては本人の勵みにもならぬこと故、以來は助直といふ銘を入れると、當人にその銘を刻らせる、その中に助廣が金を出して後ろ楯となり、直助が近江守助直といふ、立派な名前を貰つて認可を受けた、世間では彼れが助廣の子だらうといふ評判、助直が細工場を引受けたといふ噂さが立つと、大阪は大名の倉屋敷が多いところから、早くも注文がドシ〳〵と來る、それが親方の助廣よりは却つて助直の方が多い位ね。

然るにこの助廣に一人の娘があつて、京の三條殿に奉公をして居る、もう妙齡なので聟を取らなければならないといふので、家へ戻つて來たが容貌も十人並、

又堂上方に奉公をして居たことゆゑ、普通一般の教育は悉く受けた立派な女房、何處へ押出しても耻かしくない、といつたやうな次第なので一日助廣夫婦が相談をして、何うせ聟を取らねばならないのだから、茲は誰よりも彼の直助あれなら心ざまといひ技倆といひ、當家の後繼人として決して耻かしい處はないから、一つ直助に當つて見やうではないかと、機を見て直助を細工場から呼出し、

「茶を入れたからまア一杯飲んだら宜からう」

直助も呼ばれたので、

「ハイ有難う存じます」

とやつて來ると、

「時にまアお前が俺の細工場を預つて呉れて、誠に細工場も賑ふから大きに私も嬉しい、就いてはお前も何時まで斯うして俺の家ばかり肥して居ても、まア自分の勵みといふものが乏しく、又詰るまい、そこで私も考へて、お前の體の

一つ定まるやうにと思つて、相談をするため呼んだのだ、本來なら人を以ていはせるところだが、そんな手數のかゝることは好まない、年寄といふものは氣短かなものだから、此方は此方だけの量見を話し、お前はお前だけの量見を聞かせて、そこで相談して物を纏めやうと思ふが、娘のお光を貰つては呉れまいか」

「有難うございます、私をさほどまで思召して下さいまする御恩は、海山有難うございますが、何うもお言葉には從ひかねまする、實は私には少々願ひのあること、其の望の叶はぬ中は、身を定め難うございまする」

「フム、何んな望がある、人として多少望のない者はないが、大望か」

「ヘエ、まア私の身にとりましては大望でございます」

單刀直入だ、媒酌人も何もありやアしない、直助も是には流石に驚いて、返事に窮したが、

「フム、大望とばかりいつても、いろ〳〵ある、一つ打明けて話しては呉れまいか、出來ることなら俺も及ぶだけは力を盡してもやらうから話して見なさい」

「ヘエ、お思召に逆ひましては甚だ相濟みませんが、何うもチト打明け兼ねます」

「ナニ打明けられないと、して見ると天下に謀反でも企てるとか、或は……」

「イエ、どういたしまして、左樣な不都合な者ではございません」

「そんなら打明けて話が出來さうなものぢやないか、師といひ弟子といふからには、父子も同樣だ、サ話して見なさい、私だつて津田越前守助廣だ、決してお前の望を知つたからとて、それを人に洩らすやうなことはせぬ」

「御尤樣でございます、それではお話申上げますが、實は私は播州赤穂淺野内匠頭家來、勘定元締役岡島八十右衛門の下郎直助と申します者、もと私は御城下の八百屋甚兵衛と申す者の子でございまするが、幼ない時に兩親を失ひま

して、それからは全く岡島様のお手一つによつて兎も角も手足を延ばして頂きました、その御恩によつて下郎となり、一生岡島様に御奉公をして、御恩返しをしやうといふ考へ、然るに主人岡島八十右衛門は、家老大野九郎兵衛等の人々に容れられず、一年觀月の宴に御城代御家老大石内藏介殿の屋敷に於て、主人の腰の物の錆び居つたる所より、非常な恥辱を受けられましたにより、家來の身として私も是をいたく殘念に心得、其の恥辱を如何にもして雪ぎたいといふ考へから、實は大野が屋敷へ斬込まうといたしました、それを主人に意見されましたので、思ひ止まりましたやうなものゝ、何うにかして主人に良き一腰を求め上げて、萬分一の恩報じをと思ひ、故郷に置手紙をいたしまして國表を逐電いたし、この大阪の地に上りました、そこで實は町家にでも奉公をして、僅かながらも給金を溜めて、せめて五十兩と六十兩の金がまとまつたらば、大小を一腰求めて、主人に進ぜたいと思つたのでございまするが、請判をする者

がなければ、何處の家へも住込むことが出來ませんので何うしたらと考へ〳〵御當家の門に立ちましたのが御縁となり、大小を求めて主人に進ぜるよりは、一層貴郎のお弟子になつて、良い刀を鍛へ、それを主人に進ぜた方が近道といふ所から、今日まで一心不亂になり、やう〳〵只今にては細工場に籠るやうになりましたので、機があつたら貴郎にお願ひ申して、何うぞ一腰を鍛へて主人に贈り、恩返しをしたいといふ、私の考へでございます、それ故、主人の恥辱を雪ぎ、私の志の達しません以上は、私の身は定めかねまする次第、宜しくお察しのほどを願ひまする」

と涙を流しての物語。助廣も聞いて大きに同情し、

「さういふ次第であつたのか、今までお前の身分は何ういふ人か分らなんだが始めて聞いたお前の素狀、御恩返しに岡島殿の仲間となつて、忠義の二字に御奉公をするとは愈々志の正しいお前、さうと聞いては私も何うしてもお前を

當家の養子にしたい畢竟望が成就しないから聟にならないといふのだから、望が叶つたら不服はあるまい、まだ此の助廣だとて、少しも老朽はせぬ、是を一世一代の打納めとして、お前と一緒に細工場に籠り、一心になつて鍛へ上げた大小、お前の目に叶ひ、私の心に屆いて、これなら岡島殿の差料にならうといふものを拵へてから、それを土産に岡島家へ立歸り、其の後更めて私の家の聟になつてはくれまいか」

と、事を分けての嘆願に、直助疊に喰附くばかり、嬉涙と共に厚く禮を述べて助廣助直の兩人、これより諸方の注文を謝絶して細工場に閉ぢ籠り、鍛ひ上げた る二尺六寸五分の一刀及び一尺四寸三分の脇差、津田越前守助廣同じく近江守助直合作といふ銘を刻つて、研にかけ出來上つた總體赤銅造り、七子を卷いて、八十右衞門の定鏤五枚笹の紋を金にて鏤め、鞘のゝりから、鍔より切刄はゞき、小柄、目拔、緣頭に至るまで、皆何れも赤銅にて造り、袋は五瓜の龍、裏には鹽瀨をつ

け仕立は當時名ある袋物師に縫はせ、絲柾の箱に入れて出來上つた一腰は、何處へ出しても耻かしからぬ近年の名作、

「サア是を持つて故郷へ歸り、大恩ある御主人に進ぜやう」

といふので、直助、兩掛に津田近江守助直といふ札を打ち、供の者四人ばかり召連れて脊割羽織に袴、大小を差して大阪を立出でた。國を出る時には布子一枚今故郷へ歸る其の時には、所謂錦を着て歸るのであるから、流石の直助も胸中の喜びは如何ばかり、日ならずして赤穂に着し、城下に宿を取つて直ちに自身刀箱を持つて八十右衞門の宅を訪れた、しかし舊を忘れぬ直助は、態と臺所口へと廻つて案内を入れると、折節其處に居られた八十右衞門の妻女が、其の姿を見て、

「これは〳〵御身分のあるお方、陋隘しき勝手口にお出でになり、御案内とは恐入りまする、どうぞ玄關の方へお廻りを願ひます」

聞いて直助刀箱を傍に置き、敷居際に兩手を支へて、

「奥様、五年振にてお目にかゝり、恐悦に存じ奉りまする、お目違ひは御尤も、私は直助でございます」

といふのも早口の中、後は唯おなつかしやとばかりで涙に搔き暮れる、八十右衞門の妻女も驚いて、

「エッ、そなたが直助と、あの五年以前に家出した直助……」

と云ふたぎり、餘りのことに茫然として二の句も出ない。直助も同じく暫時は言葉もなかつたが、

「御恩を受けたる私が置手紙をいたして、五年以前にこの地を逐電いたし、不都合な者、不屆なる奴とお怒り遊ばされ居らるゝと、旦暮そのことをのみ思ひ續けて居りました、今日幸ひに聊かながら御恩を報じまする所存にて、歸國いたしましてございます、どうか旦那様へ宜しくお取次を願ひまして、御憤りなく

お目通りの願はれまするやう、貴女様のお取成を願ひます」

といふので、八十右衞門の妻女も我が子が歸つたかのやうにイソ〳〵として、

「オ、、宜いとも〳〵、お前も是には譯があることであらうし、又旦那様とても直助は何うしたらう、無事で居るかしら、病ひでもして居りはしなからうかと、雨の降るにつけ風の吹くにつけ、お前のことは始終陰ながらのお噂であつたほどゆゑ、何の〳〵お怒りがあるものでない、サ、お這入り這入つて早う旦那様に其の立派な姿をお見せ申して、御安心させておくれ」

と、茲に其の取次を願つて直助、絶えて久し振に八十右衞門の前へ出は出たが、直助涙に搔暮れて、唯何とも言はず襖の蔭に平身低頭する。八十右衞門も同じく涙にくれて、

「五ヶ年以前其の方が家出をいたし、更に今日まで音信不通、書置によつて其の義は察したが、何か其の方は拙者に對して恩報じといふ心から、この地を去

つたやうに覺えるが、見れば今日見違へた其方の姿、何か是には仔細のあることであらう、包まず語つて聞かせい」

と、八十右衛門の尋ねに直助が、段々と身の成行を打明けての物語り、

「今般師匠助廣より、これ〳〵斯樣〳〵、私の望を達せぬ内は、身を定めることなり難いと申したにつきまして、助廣が一世一代の打ち納め、私も共に精神を入れて鍛へましたる大小、直助が心盡しの土産と思召させられ、御一覽の上御帶用下し置かれますれば、今日これにて九牛の一毛の御恩報をいたしまする考へ」

といひながら直助、かの刀箱を八十右衛門の前に差置く、取上げて八十右衛門見ると、その拵へといひ刀身といひ、實に美事な物、大が二尺六寸五分で小が一尺四寸三分、明晃々として水も滴れんばかりの秋水一腰、こゝを拔いて見ると、津田近江守助直、津田越前守助廣としてある。

「當藩廣しといへども、かばかりのものを帶する者は我一人、誠に八十右衛門何よりも喜ばしい次第、其方の志、家來なればこそ、直助過分に存ずるぞよ」

と涙を流して八十右衛門は喜んだ、

「ついては直助、其方は宿をとつて居るか」

「御意にござりまする」

「さうか、それでは此の九月の十三日、例によつて大石太夫の屋敷で、觀月の宴がある、その折この刀を滿座の人々に見せて、五年跡の耻辱を雪がうから、それまでは逗留して居つて呉れまいか」

「畏りました、私で事足りる事なれば、何なりとも御用仰せつけ下されまするやう」

とそこで八十右衛門がこの一腰を持つて内藏介の屋敷へ行き、委細の物語をしたゝ。すると内藏介も其の話に甚く感心をなし、

「幸ひこの十三夜の觀月の宴、その當夜は相變らず大野九郎兵衛も參るによつて、人々の面前にてこの一腰を示し、先年の耻辱を雪がれなされ、萬事は拙者が取り計らうでおざれば……」

と何やら内藏介が密々に口を添へたので、八十右衛門は大きに喜んで立歸り、直助に此の話をする、直助も共に喜んで其の日の來るを待つてゐる。やがて當日となるや、家中の武士だち、我も〳〵と内藏介の屋敷へ夕方から集る、酒宴酣になると、まづ内藏介が滿座の人々に向つて、

「扨、方々、相變らず斯樣に御一同集會して懇親の宴を開き、分けて今晩の觀月は清らかなる所の月でおざるによつて、實に年々歳々、我等此の義を喜ばしく存じて居る次第、それについて、武備を怠らぬやう、今晩は各々胸襟をひらき、文を讀み武を講ずるは武士の平生心掛くる所と申すでおざれば、相變らずお腰の物の御鑑定は如何でおざらう」

といふと、例の大野九郎兵衛、我が意を得たりとばかりで、

「此の道にかけては拙者の得意、御遠慮なく方々お腰の物をお出しめされよ」

と、天井がキナクサイといつたやうに鼻を盛に動かせるので、

「然らば拙者のものを……」

「拙者も願はう」

と、好い刀を持つて居る者は九郎兵衛に鑑定して貰つて居る。八十右衛門はそれ等を見ぬ振して座敷の隅に默然として居ると、九郎兵衛が其の樣子に目をつけて、

「ヤ、岡島氏、先年お手前のお腰の物を批評いたしたが、その後は更に拜見仕らぬが今日は彼の時のものではおざるまいな、新にお求めなされたか、それとも又お差換の美事なのを御所持になるか、相變らず大野拜見いたして、遠慮のない所を申さうでおざるかな」

人を愚にした云ひ方だ、しかし八十右衛門は其の怒を少しも表さず、

「然らば御覽に入れ申すでおざる」

と取出したる大小、ッと九郎兵衛の前に差出した。見ると震ひつくやうな立派な拵へだから、今年も一つ嬲つてやらうと思つた九郎兵衛、案に相違したので思はずハッとしたが其處は拔からず、

「これは〳〵、特にお誂へと見えて、貴殿の御定紋が象眼入となつて居る、誠に立派な、鍔といひ鞘といひ、結構なものでおざる」

といひながら、スラリ引拔いて見ると、所謂光鋩四射して天を衝くの概、身の毛も戰慄つやうな鍛へ振だ。

「フム、是は岡島氏、新刀でおざるな」

「左樣で、先頃依頼いたして鍛へさせ、漸々拵をつけて始めて今宵帶びて參つたるもの、御鑑定は……」

「イヤ、古刀の方は鑑定も屆くでおざるが何うも新刀の方は拙者不調法で……しかし失禮かは存ぜぬが、攝津鍛冶の鍛へたもの、井上眞海か、津田助廣かでおざらうと拙者推量いたしておざるが、如何で……」

「なるほど流石は大野氏、その助廣の伜近江守助直と助廣兩人の合作でおざる」

「さやうでおざつたか、實に何うも美事なものでおざるな」

と九郎兵衛も流石に一點非のない此の刀ゆゑ頻と賞めて居る。すると内藏介が是を見て、

「方々に申入れるが、その近江守助直が各々方とお近づきになりたいと、岡島氏が同道いたして參つておざるにより、各々方御注文もおざるなら、御依頼に相成つては如何で……」

「それは好い機會、侍に刀鍛冶、懇意になつて置けば、又無理も聞いて呉れるでおざらうから、何うか太夫恐れ入るでおざるが是へ……」

と一同がいふので、右の直助その席へと出た。一同が、

「拙者は奥野將監」

「拙者は吉田忠左衞門」

「拙者は大野九郎兵衞」

と名前を名乗つて紹介も濟んだが、誰一人助直が八十右衞門の仲間直助だとは知らない。そこで内藏介が大野に向つて、

「大野氏、貴殿お賴みがおざるなら何なりとも一つ御注文なすつては……」

といふと、根が慾の深い九郎兵衞、助直が今日初めて自分等と顏を合したのだから、披露目のために無代で鍛へて呉れるのだらう、それに就いて、自分か高祿だから内藏介が氣を利かして斯ういつたのだらうと、飛んでもない所へ氣を廻したので、是は賴ねば損だとばかり、

「年を老つて幅廣物や寸延を帶ぶるも業々しく、細身作りの大小一つ、勝手な

賴みのやうでおざるが、何うか老人の差料として、お間にあつた節お鍛へ下されい、藏屋敷留守居から又相當の御禮もいたさうほどに、一つお願ひ申すでおざる」

直助は心の中で、此の爺奴、覺えて居ろ今に主人の耻を雪いで呉れるからとは思つたが、そしらぬ顏、

「恐れ入りまする、相違なく鍛へるでおざりませう」

「それは有難い、して何時頃」

「左樣でおざります、何うも唯今何時と申し、お請合ひは出來かねまする、殊にこのほど逗留中、二三の御同藩から御注文もありまするこゝろ……」

「なるほど、まア順番にしたところで、當年内には出來いたすでおざるかな」

「イヤ、とても當年内には……」

「ホ、ー、然らば來年には……」

「イヤ、來年どころか來々年でも出來いたしかねまする」
「ホー、左樣に長く掛るでおざるかな、然らば五年ぐらゐも……」
「イヤ、なか〳〵もつて、五年が十年でも、五十年が百年でも出來いたしかねるやも量られません」
「馬鹿〳〵しい、貴殿人を嘲弄なさるにも程がある、如何にこれお身が天下有名の刀鍛冶にもせよ、五十年も百年もとは……」
「イヤ、それが順番と仰せられまするにより、順番と申せば、恐れながら上は將軍家より二百有餘の諸大名、旗下、倍臣、御家人、天下に刀を帶する人幾人やら量られませぬ、手前父助廣が、諸方より受けましたる注文山の如く、それを順次に鍛へ行きますれば、手前等の命が例へ百年、二百年を保ちましても、なか〳〵出來いたしかねまする次第」
と嘲弄半分に、主人の敵と思ふから直助がビシ〳〵答へる。九郎兵衛是を聞い

ては流石に腹の蟲が納まらない、
「イヤ、止にしやう、氣煩はしい、殊に拙者は新刀が嫌ひぢや、今日こゝに帶して居るのは、卽ち粟田口國綱だ、まア此の時代のものでなければ役には立たぬ、拙者が國綱をお見せ申さう、後學のため、よく見ておかつしやい」
と取出したる國綱、直助は、
「拜見仕る」
といひながら紙を食へて拔いて見ると、二尺三寸五分の深反り、流石は粟田口の作だけあつて燒刄には何ともえいはれぬ味がある、直助これを見て何か瑕でもありはせぬかと、ためつすがめつ目をつけて行く中に、不圖見出した刄ばき元から一寸ほど上にある横瑕、と直助大口を開いてカラ〳〵と笑ひ、
「なるはど、國綱は國綱に相違なく、美事な刀、名人の作には違ひおざりませぬが、これは物の役に相立ちませぬ、大平無事の今日には、或は相當いたすか

も存じませぬが、亂世などには先づ竹篦にも劣つたるもの……」

「エ、、耳立つたことを言はれるな、この大野九郎兵衞の粟田口を戰場にては役に立たんと……竹篦同樣ぢやと、……聞捨にならん、勘辨ならぬぞ」

九郎兵衞目に角を立つて直助を睨めつけた、しかし此方は直助、その道にかけての目を以て見たのであるからビクともせぬ、セヽラ笑つて、

「左樣でおざりまする、それは御貴殿のお目には止まりますまいが、及ばき元一寸上に瑕がおざります、縱瑕なら別に差支ないとして、これは横瑕でおざりまする、恐らくは研師と刀屋と申し合せ、この瑕を隱したものと存じまする、たゞソッと差して居られる分には差支もおざりませぬが、一朝戰場に出でゝ敵の鍔に當るとか、若くは敵の兜を打たんには、この刀及ばき元一寸上から脆くも折れるに相違おざりませぬ、その場に臨んで御馬前の功名も立たず、脆くも敵のために討たれんければならぬ譯、武士の魂は腰の物、その魂に瑕がおざり

ましては、チト御鑑定家といふにも相違いたし居るやう、手前存じまするが如何でおざりませうか」

「その瑕は何處にあると申すのぢや」

「それは此處にあると申した處が、貴殿にはお分りに相成りますまい、論より證據、手前が此の扇にてポンと一打いたさば脆くも折れること請合、なんなら折つて御覽に入れるでおざりませうかな」

「フム、これは面白い、扇で叩いて折れると申すなりや、折つて貰はう、若し折れぬ其の時は、武士たるものゝ魂を汚した廉をもつて、其方を其の儘には差置かんから左樣心得ろ」

「宜しうおざる、確かに承知いたしておざる、併し扇と申しても此の鍛金でおざる、自分が細工場に於て作り上げたる扇の親骨目方は左までにおざりませぬが、唯の素骨の扇とは違ひまして、親骨が鐵でおざりまするぞ」

「なるほど鐵扇ぢや」

「御意におざりまする」

「ン、それで叩いて相違なく折れると申すのぢやな」

「左樣、折れまする處は及ばき元一寸上から折れまする、それがこの刀の瑕でおざりまするれば、宜しく御覽下されい、若し折れませぬ其の時は、手前が貴殿の腰の物を汚したる廉をもつて、如何やうにも御存分になさるやう、毛頭手前はそれに異存おざりませぬ」

と、拔いたる刀を右手に持ち變へ、右手にとつたる鐵扇にて、矢庭にその峯をボーンと打つと、果して及ばき元一寸上から、脆くもポキーリとばかり折れた、滿座の人々これを見ると、

「ヤア好い氣味だ、態を見るが宜い」

とドッと聲して囃したつた。九郎兵衞眞赤になつて、

「これは怪しからん、拙者の刀の折れたを好い氣味とは何のこと、かりそめにも上席を汚す此の大野九郎兵衞を嘲等なされてか」

「イヤ、さやうではおざらぬ、好い月見と申したのでおざる、アッハッハ……」

流石の九郎兵衞も其の場に得たへず、鮑々の體で姿を隱してしまつた。こんな事があつたので、前にいつた通り、主家凶變の際、國庫金分配の席上で、九郎兵衞が八十右衞門を惡口したのであるといふことである。

それは兎に角、八十右衞門常樹は、一方斯く其の下々の者に對して、極めて情け心の深かつたにも拘らず、其の武邊の道もなか〳〵に達者なものであつた。主君内匠頭まだ在世の頃、一年湯治の望みあつて彼は播磨の山中溫泉といふのへ赴いたことがあつた。

其の日、彼は君侯から溫泉入湯の許を得たので、重役等の許などへ挨拶に廻り、家に歸つて仕度を調へると、其の日は既に暮れ果てた。家内の人々は、明朝出立

したら宜からうと勸めたが、既にお暇も頂き、重役達へも出立いたす旨挨拶しながら、翌日にそれを延すなど武士のなすべき事でない、夜中だとて何の事かあらうと八十右衞門いつかな聞き入れず、夜道も時には一興だとばかり、日頃召使つて居る所の文助といふのを伴につれて家を出た。しかし七里の行程、あまつさへ山路で人の往來もないやうな處とて、宵闇を破つて八十右衞門は文助と話し〳〵、山深く分け入つたが、不圖行手の彼方を見ると、光りがあつて人聲が聞える、伴の文助は是を見て、早人里へ來たのかと一人先へ立つて樣子を見ると、焚火をドシ〳〵焚いて荒くれた男が七八人、其の周圍で酒をあほつて話をして居る。

「オイ兄弟、ソロ〳〵里へ仕事に出掛けやうかな」

「さうよ、ソロ〳〵出掛けやう、今夜あたり、一つ旨え仕事をやつゝけなけりゃア、お互に旨え酒も飲めねへつて譯だ」

と、話の一つ二つを聞く中に、流石の文助山賊だと氣がついたから驚いた、こ

れは大變だと、早速後へ引返して八十右衞門に斯くと知らせた、

「旦那樣、大變でございます、此の先に、あの焚火をして居る七八人の者が居りまするが、其は山賊で、是から此方の方へやつて參ります樣な樣子、今の內に後へ引返すなり何處かへ逃げるなりしなければいけません」

「何、山賊だ、それは文助しめた」

「ジョ冗談仰しやつちやアいけません、旦那樣どうか脅かさないで……」

「イヤ脅かしなぞはせんが、文助大丈夫ぢや、構ふことはない、ズン〳〵先へ行け」

「行けッたつて旦那樣、腰が此の通りで」

可哀さうに文助はや腰がブル〳〵震へて居る始末、八十右衞門それには更に頓着せず、悠々と其處を通拔けやうとした。すると早くも是に目をつけた山賊の三四人、バラ〳〵ッと驅寄りざま、

「オ、旅人、少し待ちな」
聞いて八十右衞門、色をも變へで後ふり向きながら、
「何ぞ用かの」
とばかり澄したもの。
「ウム、用がありやこそ呼んだのだ、といふのは他ぢやアねへ、お前達ア何所の者だか知らねへが、此の山ア御預主のお止め山なんだぜ、通行は出來ねへよ
それを何う迷つて來たか知らねへが、此處を通るといふからにやア、幾らか運上が出るぜ、コウ旅人、幾らか錢が出るんだ、置いて行きねへ」
「ア、左樣か、金を置いて行けと申すのか、して何のくらゐぢや」
「何のくらゐも此のくらゐもねへ、身ぐるみ悉皆置いて行きねへ」
「好し、遣はすから、承取れ」
いひながら傍にあつたる立木を早速の後楯、キッと體を備へた樣子に此方の山

賊もそれと悟つたか、
「面倒だ、やつゝけろ」
と、一齊に山刀を拔連れ〳〵切つて懸つたから驚いたのは文助だ、いきなり木の根方へもつてつてペチャンと早くも腰を拔すと八十右衞門に於ては來たなとばかり、
「ソレやるぞッ」
と一聲、腰間の大刀拔く手も見せず、中央の一賊を眞ッ二つ、返す刀に飛びこんで來た一賊の一刀を引つ外しざま躍りこんで一太刀、肩から乳の下かけて打つ放す、此の有樣に殘る奴等の五六人、
「アッ」
と叫んで逃出す所を、又もや後ろから一賊めがけて一振り振つたる一刀は、美事其の腰車へ斬りこんだからキアッと一聲、後の奴等は是にます〳〵驚いてチリ

〳〵バラ〳〵何處ともなく逃げ去つた。八十右衞門は可笑しさを耐へて、

「これにて酒手は充分であらう、それともまだ不足なら如何ほどにても呉れてやるほどに早々これへ引返せ、赤穂の武士岡島八十右衞門とは拙者が事ぢや、よく覺えて置け」

と大聲あげて笑ひ出し、

「文助、まア此處へ來て一杯のめ」

「ヘヱ、ですが旦那樣いけません」

「何がいけぬ」

「立ちません」

「立たぬと申して何が立たぬ」

「ヘヱ、腰が立ちませんので」

「ハ、、、、意氣地のない奴だな、それでは拙者がはめてやらう」

と後ろへ廻つて文助の腰を入れる、文助は心から主人の手の中に驚嘆して、

「扨も畏れ入りましたるお働き、豫々お力のあるといふことは人樣の御話しに承つて居りましたが、是程とも思ひませんでした、何人ばかりお斬り遊ばしました」

「さうさ、まア二三人は慥に切つたな」

「左樣でございますか、豪いお腕前で」

「まア文助、そんなことは何うでも宜い、茲へ來て一杯飲め、サア錢の出ないのを飲まして遣はすから來い」

と主從は一杯二杯、互に盃をかはして熏然。やがて此處を去り、夜更けて山中の溫泉に着いた。二人は悠々として湯治を了へ、既に日數も經つたので、再び元來た路を辿つての歸り途、前に賊を仆した處に差掛ると、何思つたか八十右衞門は懷中から財布を取出し、木の枝に懸け、文助を顧みて、

「さて〳〵先頃は不憫の事をした、しかし要用のあつた金ゆゑ仕方もないが、今はもうその必要もない、額の減つたのは氣の毒ではあるけれど、彼奴等仲間が世渡の助ともならうか」

と呵々大笑して立去つたといふ。

八十右衞門は、性剛毅活潑で、常に此の僕の文助を勞つたこと普通の主從の沙汰ではなかつた、例へば時に、文助が病むやうなことでもあれば、八十右衞門自ら藥を煎じ、口に合ふやうな食物をやつて、

「決して遠慮するな、早く癒つて呉れ、其方が寢て居つては、拙者も何となく心掛りで面白うないからな」

と出來るだけの力を盡してやるやうな風であつたから、文助も亦八十右衞門に事へること普通一通りではなかつた、それほどであつたから、彼の快擧決行のため、八十右衞門が江戸表へ下つた際の如きも、文助は依然其の行く所に隨うて、

骨身を措まず奉公し、愈々討入となるや、強つてと供を願出たが、もとより許さるべきことではないから、八十右衞門よく〳〵それを宥めて戻したといふ。後、八十右衞門が毛利家へお預となつて、翌年二月、一黨の諸士と共に切腹せられたと知るや彼れ文助の悲痛哭嘆、他の見る目もいぢらしかつたとか、終に髮を剃して名を專入と改め、主人八十右衞門の冥福を追修したといふことである。

討入當時、彼は淺黄の下着鼠裏金筋の小手脛當、三枚錏の甲に赤銅造りの大小さして、敵營の奥深く突進し、忽一敵を手取りにして繩をかけ、上野介の寢所を案内せよとばかり、引立て〳〵連れ行いたとか。其の切腹するや、毛利家の家臣近藤爲右衞門介錯をなして、惜しや三十八歳の壯漢は朝の風に誘はるゝ名殘の霜とこそ、潔よくも美しく消え失せたといふ、彼れ法號を「及神拂劍信士」といつて、泉岳寺内中央西に面して石碑が建てられてある。

神崎與五郎則休

神崎與五郎則休は、美作の人である。寛文二年を以て、同國津山に於て生れ、其の父又市といふは、津山侯へ事へたが、貞享年中に同侯伯耆守長武が、其の家兄忠繼の嫡男美作守長成に本藩を讓り、別に二千石を賜つて、支藩に列せられた際、從つて移つたものが、又市隱居の後は與五郎家督として此の伯耆守長武に事へて居た。然るに元祿九年、不幸にして伯耆守が卒去せられ、其の繼嗣のことから、主家の斷絶に會つた。そこで彼は浪々の身の上となり、兩親を本國に殘して播州に來り、暫く赤穗に流寓した。すると何時か彼が氣節ある立派な武士であるといふ事が、內匠頭長矩の耳に入り、遂に五兩三人扶持を賜つて、淺野家へ事へることゝなり、徒士目付の役に任ぜられた。

其の幼時、彼が十四才のときであつた、一日彼は從弟の寘作十兵衞といふ少年と共に、小鼓の稽古に城下なる津山に赴いた。當時はまだ戰國時代の餘弊を受けい

て、彼の男色が至る處に流行し居つた際とて、所謂現時の稚兒さんなるものが持てはやされてゐた。其の頃津山の市中に、彦七といふ無賴漢がゐて、夙に此の十兵衞の美少年なるに惚れこみ、尾けつ廻しつ其の後を追ひ廻して、是を手に入れやうと計つたが、十兵衞は承知せぬばかりか其奴の無禮を散々に叱斥して恥しめた。處がよくある例で、彦七奴是を深く遺恨に思ひ、今は可愛さあまつて憎さが百倍と、折柄道に出遇うたを幸ひ、突然一刀を引き拔いて十兵衞が花恥かしき顏に切りつけ、其のまゝ雲を霞と逃げ出した。と、是を見たる與五郎則休怒氣滿面に溢れて、

「汝れ無禮者めッ」

といふより早く其の後を追ひ駈けざま、肩先から一太刀浴せ、倒れる處を隙さず乘りかゝつて止めを刺し、美事對手を討止めて友の仇を討つた、といふのが與五郎生立の實說であるとしてあるが、講談などにては此の敵討からして、面白く

其の生立を說いてある、卽ち與五郎則休は元からの武士ではない、播州赤穗の城下汐入村の百姓の忰で、幼名を太郎作といつた、所が赤穗の城主淺野內匠頭の家臣にして、祿百五十石を領し、郡奉行を勤むる神崎與左衞門といふ人があつた、至つて方正の君子で、上を敬ひ下を憐れむといふ誠に評判の宜い武士、然るに此の人子といふものが唯一人しかない、名を與太郎といつて、當年十四才、それも生來の暗愚とあつて、毎日〳〵ブラ〳〵しては遊んでばかり居るといふ厄介な忰があるのみなので、與左衞門も、是には匙を投げてしまひ、何うももう神崎の家は他人を養子として立て行くより仕方がない、迚もある與太郎には此の家を繼ぐだけの器量はないと、涙を呑んで斷念し、其の爲すが儘に任して置くといふ風であるので、結局それを喜んだ與太郎、樂みな釣をば、毎日〳〵仲間の文助といふのを供にしてやつてゐる、或る日のことであつた、毎日の通り文助に釣道具を持たせて、汐入川の堤へやつて來り、兎ある柳の樹影に身體を据えた。

「文助餌をつけろ」

「へイ」

文助も毎度のことゝで、面倒だから空返事をしてゐる。

「文助、餌をつけろと申すに」

「へイ、ですけれども若旦那、餌くらゐは御自分でお付けなさいな、釣好は皆自分で餌をつけるから面白いので、貴郎のやうに人に餌をつけさしちやア面白くも何ともありやアしませんよ」

文助も五月繩から思はず一本極めたが、根が馬鹿の與太郎だから何とも思はない、

「何でも宜いからつけろ、手が臭くなるから、自分では付けんのだ」

「仕樣がねえなア」

仕方がないから文助、不承無精に餌をつけて、

「さアつけましたよ」

「よし、ついたか」

と與太郎先生、河の中へポンと投げこんで暫らく樣子を見てゐる、すると少し當りがあつたものと見へて引き上げたが、何時か餌を取られてしまつてゐる。

「オヤ〳〵文助、餌を取られてしまつた、又つけてくれい」

「隨分厄介ですね、一々餌をつけさせられては閉口だ、それに毎日〳〵此所へ來て、魚に餌を施すばかりでも、若旦那、些とやそつとの事ぢやアありませんせ、面倒だから一々針へつけないで、餌箱ぐるみ投り込んでやつたら何うでしよう、手數が掛らないで宜いぢやアありませんか」

「馬鹿をいへ、主人へ對して一體何といふ言ひ草だ、主人が餌をつけろといつたら、默つてつけい、兎や角申すと斬つてしまふぞ」

「ヘン、よく斬る〳〵と仰しやるが、貴所に切られるなア、死んだものか藁人

形ぐらゐなものだ」

「なにを、無禮な事を申すな、そんな事を申して居る間に、早く餌をつけろ」

「ヘイ、仕方がねえや泣く子と地頭だ、つけてやらうよ」

「なに、泣く子と地頭だ、そりや何ぢや」

「なに此方のことですよ、イヤに馬鹿の癖に耳が近えなア」

と口小言をいひながら、文助餌をつけてやる、それをポーンと河の中へ入れた與太郎、暫くすると又餌を取られてしまい、

「餌だ〳〵、文助餌だ」

と、餌ばかり取られて少しも魚は取れない。與太郎も焦氣こんで癇癪を起し、

「餌だ〳〵」

と餌を付さすること數度で、文助を責めつけるので、文助も困り切つてゐる。

すると遙か向ふの是も柳の下で、一人の小僧が頻りに絲を垂れてゐたが、何うい

ふものか中々よく釣れる樣子、サア與太郎是を見ると堪らない、

「文助、アノ小僧が皆釣つてしまふから拙者が釣れんのだ、場所を取り變へて拙者を彼所へ連れて參れ」

「若旦那、そんな解らないことをいふものぢやアありません、あの小僧は釣が上手だから澤山釣れる、貴所は釣が下手だから一つも釣れないんです、それより此所に辛抱してお居でなさい、其の間には死んだ魚か運の惡い魚が一尾ぐらゐは釣れませうから、さうなさいまし」

「何だと、默れ、主人の吩咐を背くと斬つてしまふぞ」

「極りをいつて居らア、よく斬る〳〵といふが、さう無暗と人が斬れるものぢやアございませんせ、侍が人を斬るために刀を差すと思ふと大間違だとは、常々貴所旦那樣にいはれて居るぢやアありませんか」

「何でも宜い、早く行つて小僧に然ういつて來い」

「仕樣がねえ馬鹿旦那……いやさ若旦那だなア」

とブツ〳〵いひながら文助彼の小僧の處へ來り、

「コレ〳〵小僧、大層釣れるなア」

「叔父さん、今日は好いお天氣でございます」

「ウム、なか〳〵お世辭のいゝ小僧だな、オイ小僧、お前彼處に居るのは誰だか知つて居るかい」

「ハイ知つて居ますとも、郡奉行の若樣でございませう」

「ウン、さうだ、よく知つてゐるなア」

「でも毎日釣にお出でになるから知つて居まさアね」

「さうか、時に小僧、あの若樣がな、お前にばかり釣れて自分には些とも釣れねえものだから、色々な無理なことをいつて此處と場所を取り變へてくれといふのだが、お前氣の毒だが然うしてやつて呉れねえか、後生だ」

「エ、宜しうございますとも、もう仕舞つても宜いんですが、折角釣れますからモウ四五十尾も釣つて歸らうと思つてゐたんです、しかし私も是を遊びに釣るんぢやアないんです、私はお父さんも阿母さんも、疾うに死んでしまひまして、今年七十になる祖母さんと二人で居るんです、其の祖母さんが、去年から目が閉れてしまひまして、私がこんな小さいものですから、百姓も出來ず、仕方がないから釣をして、取つた魚を村の小父さん達に買つて貰ひ、祖母さんと二人で食べてゐるんです」

「ウム、お前のことかい、それぢやア親孝行つて評判のあるのは、何才だい」

「九才です」

「ナニ九才だ、ウム、九才や十才で親を過して行くやうなお前もあるのに、十四になつてもあんな腕白者もある、氣の毒だが小僧、若樣が場所を取り變へて呉れろといふんだから變へてやつてくれ」

と、此處で場所を取り變へて釣り始めたが矢張り與太郎には一尾も釣れない。其の内に餌がなくなつたものだから、

「文助や、屋敷へ行つて餌を取つて來てくれ」

といひ出した、文助も、

「困らせるなア、もうお止しなすつたら宜うございませう、何程やつたつて貴所には釣れやアしませんから、宜い加減にしてお歸りなすつたら何うです」

といふと、又しても與太郎お定りだ、

「主人の吩咐に背くと斬つてしまふぞ」

「よく貴所は斬る〳〵と仰しやいますなア仕方がねえや馬鹿に構つて居た所で何うにもなりやしねえ、ぢやア餌を取りに行つて來ますから、若旦那、貴所は何處へも行かないで下さいよ」

と、仲間の文助は城内の屋敷へ行つてしまふ。すると與太郎は其の間に何と思

ふたか、ッか〳〵と太郎作の側へやつて來て、

「コレ〳〵小僧、そんなに一人で釣るな」

「ハイ、コレは若樣、今日は好いお天氣でございます」

「結構なお天氣だ、そんな事は何うでも宜い、此處で釣をすることはならんかう、他處へ行け」

與太郎先生、自分が釣れないので癇癪まぎれ、飛んだ所へ無理難題を言ひかけた、是には小僧の太郎作も弱つてしまひ、

「若樣、そんな御無理を仰しやつては困ります、先刻、御家來さんにも申しました通り、私は遊びに釣をいたして居るのではありません、祖母さんを養ふために營業にして居るのですから、何うか御勘辨下さいまし」

「イヤ例へ營業にして居ても、此の河はお父さんの河だから、無暗に此所で釣をしてはならん」

「それは若樣、違ひます、此の川は何も貴所のお父さんの河と定つた譯のものではございません、此の國も此の川も皆な貴所のお父さんが殿樣から預つて居るんです、皆な殿樣のものです、それを貴所のお父樣が預つてお居でなさるのでと、貴所のお父さんのものといふ譯ではありません」

太郎作もあまりのことに思はずいひ返すと、突然、

「此の小僧め、理窟をいふか」

とばかり、傍に釣り溜めてあつた魚籠の中の魚を皆な自分の魚籠の中へ入れてしまひ、あまつさへ太郎作の釣竿までも散々に折り碎いて川の中へ棄てゝしまつたので、あまりといへば無理無體な仕方と、流石の太郎作も勘忍袋の緒が切れたか、

「若樣、可哀さうなことをなさいます、魚は欲しければ殘らず差上げますが、釣竿を折つてしまつては、明日から釣に出ることが出來ません、釣に出ること

が出來なければ祖母やを喰はせることが出來ません、魚は上げますから、貴所の持つてゐらつしやる釣竿のなかゝら一本私に下さいまし」

といひながら、手をかけて取らうとする、すると與太郎は取られまいと大聲あげて、

「此の盗賊ッ」

と呼んだので、躍起となつた太郎作は、

「貴所こそ盗賊です、貴所は私の魚を皆な取つておしまひになりました、私は下さいといつて、貴所の釣竿を頂戴するのです盗賊するのぢやありません」

と、猶も取らうとする、是を聞いた與太郎先生は、

「何だ、武士に向つて盗賊だと申したな、斬つてしまふから其處動くな」

といふより早く腰に差したる短い刀を引き拔いた。いくら郡奉行の忰でも、馬鹿だと思ふから、そんなに好い刀は差さして置かない、といつて左程鈍刀でもな

から、ピカリと光つたので百姓の太郎作流石に驚いて逃げ出した。とそれを面白がつて此方の與太郎、ドン〳〵後追馳けて來たが、何うした途端か物にでも躓いたと見え、ドターリ倒れる途端に持つてゐた刀がヅブり脇腹深く突き通したから堪らない、ウーンと一聲反向に倒れたまゝ、朱に染つて息絶えた樣子に是を見た所の太郎作も驚いた、

「ヤア大變なことをしなすつた、是は大變何うしたら……」

と、いくら利口なやうでも其處はまだ年の行かない子供のことゝて、氣も轉倒して其のまゝ村へ飛んで歸つて來て、名主の源右衞門といふのに是々だと告げ知らせた。源右衞門も大きに驚いて、それは大變と早速村の重立つたものを呼び集め、

「實は是々斯々の次第で、太郎作が飛んでもない事を仕出來したが、いくら自分で轉がつて死んだとはいひながら、誰も見て居ない事だから證人がない、そ

こで私の考へぢやアお上から手の這入らない先に、太郎作を縛つて連れて行き、是までの孝行の話をしてお願して見たら、あのお奉行様の事だから助けて下さるに違ひない、向ふから手が這入つて太郎作を召捕る事となつては迚も命乞ひは聞かれまいと私は思ふが、皆なは何う考へるかね」

と相談に及んだ、一同も其の言葉に、道理だと是から涙を呑んで太郎作に繩をかけ、村内役柄の者が附き添つて、郡奉行神崎與左衞門の役宅へ訴へ出た。やがて白洲が開けて一同の者はゾロ〳〵と其處へ呼び入れられた、見ると正面一段高い處に控えて居るのが神崎與左衞門、

「コレ〳〵、一同の者揃つたか」

「ヘイ、皆な揃ひ出でましてござりまする」

「左様か、然らば相尋ぬるが、此の繩附は何者か、又如何なる次第を以て、斯く拙者の忰を殺害いたして、筵包のまゝ擔ぎ込んだるか、詳しく申り上げえ」

「へゝい、畏れながら申し上げまする、手前は御城下汐入村の百姓にて、名主を勤め居りまする源右衞門と申す者でござりまするが、今日此方の若様が汐入村の堤で釣をしてお居でになりますと、矢張り此の太郎作と申しまするものが釣をいたして居つたのでござります」

「フム、して此の太郎作といふは當年何才に相成るか」

「ヘイ、當年九歳になりまするで、兩親に分れまして、目の見えませぬ祖母を此の小忰が釣をいたしては養ひ居りまして、至つての孝行者でございまする」

と、是から汐入川の畔で過つて與太郎の死んだことをば逐一話をした上、

「斯様の次第でござりますれば、何卒御慈悲をもちまして太郎作の命、お助け下し置かれますやう」

と命乞ひに及んだ。すると何と思つたか與右衞門烈火の如くに怒り出し、

「イヤ相成らん、其の太郎作とやらは、拙者が忰の敵ぢやによつて、奥庭へ廻

し手打ちにいたす、最早容赦はいたさん」

と、疊ざはりも荒々しく奥へと這入つてしまつた。サア源右衞門を始め一同の者、今は取りつく島もなく互に涙ぐんで太郎作が身の上のみ、哀れと思はぬ者はなかつた。

此方はやがて奥庭へと引かれた太郎作、もう仕方がない、此の上は潔よく奉行の手に掛つて死なふと、子供ながらに最後の覺悟をキッと定めたので、更に惡びれたる氣色もなく、設けの筵の上へピッタリ座を占めて、手を合せ居る樣子、與右衞門は一刀に水を掛けさせて充分の支度をいたし、

「小僧覺悟は宜いか」

「ハイ、もう覺悟をいたして居ります」

「左樣か、何か後へ心の殘るやうなことはないか、あらば遠慮なく申せ、臨終の慈悲に聞き屆けて遣はすぞ」

「ハイ、有難うはござりまするが、別に心にかゝる事とてもござりません」

「祖母アの事が心に掛らぬか」

「ハイ、心に掛らぬ事はございませんが、今更何うも仕方がございませぬ、唯後々の處は、村の人だちが賴みでございまする」

「左樣か、然らば直ちに手打にいたし呉るゝほどに、眼を閉れ」

「いゝえ、眼なんか閉らないでも宜しうございます、さア早く斬つておくんなさい」

「好しッ、小僧覺悟いたせ」

といふかと思ふとピカーリ光つた與左衞門の一刀に、哀れや太郎作の首は前にコロリと落ちたかと思ひきや、刀の平でピタリ、太郎作はと見ると首も縮めず平氣でゐる。

「コレ小僧、貴樣の首は落ちたぞ」

太郎作は頭を撫でたり首筋を撫つたりして居たが、
「旦那様、まだ首は落ちません、付いて居りまする」
「イヤ落たのぢや、それが又付いたのだ」
眞逆手品師ぢやあるまいし、首の取り離しは出來ないが兎に角太郎作の命は思ひがけなく與左衞門の手に繼ぎ止められた。與左衞門はそこで直ぐと奥方を呼び寄せ、
「悴は愚鈍、此の小僧は如何にも怜悧にして、且は年にも似合はぬ膽力のある奴、愚かしき悴を捨てゝ、斯樣な賢しき小悴を得たのは拙者の僥倖である、よつて今日より此の者を拙者の養子といたし、更めて此の神崎家を繼がせる心得である故、左樣思ひなさい、若し兎や角申すならば此の場限りで離縁いたすより、よく〳〵心得なさい」
大變な事になつたので奥方も呆氣に取られてしまつた。其の中に太郎作の頭髪

を結ひ直すやら、衣類を改めるやらして大小を腰に帶せ、再び以前の白洲へと是を伴ひ出でたる神崎與太衞門。
「コレ〳〵、一同の者、唯今太郎作を手打にいたしたれば、其の死骸を引取つて退るやういたせ」
「ヘイ、左樣でございまするか、それではまア可哀さうに太郎作は遂々殺されましてすか、可哀さうに……南無阿彌陀佛々々々々々々」
「さゝ念佛などは後で早々太郎作の死骸を引き取つて下れ」
「ヘゝッ、それでは下りまするでございますが、太郎作の死骸は何處にありまするので……」
「オ、其の死骸か、其れはソレ、其處に莚包になつて居るではないか」
「ヘイ此れで……旦那樣、御串戲仰しやつちやアいけません、此れは若樣で」
「默れ、苟しくも武士たるものゝ悴が、百姓町人などの子に、殺されるといふ

ことがあるか、白痴奴ッ、よく目を開いて見よ、悴與太郎は斯く拙者の傍に袴羽織大小をつけて坐つて居るわ、其の方達には見へんと申すか、其れなる莚包は、太郎作の死骸ぢや、早々引取つて退れ」

言はれてつッと與左衛門の傍を見れば、嬉しや孝行者の太郎作が羽織袴に二本さして居る其の姿、一同ハッと許りに與左衛門が意中を察し、思はず頭を大地に擦りつけて有難涙に掻き暮れたといふ。

扨も其の後此の太郎作が、武士的教育のもとに人となつた其の人物こそ、誰れあらう赤穂藩中に其の人ありと知られたる、神崎與五郎則休ならんとは……といふのが講談的與五郎則休の生立である。

彼は實に文武兩道に達した立派な武士であつた。其の武とし勇としては、前にもいつた如く年十四にして友の敵を討ち返したほどであるが、幼よりして書を好むこと所謂飯よりも好きなくらゐ、好んで讀書に耽り文を講ずるを其の樂みとし

た、彼は生來、何が故か佛法が大の嫌いで、「南無……」といふ聲が耳に入つても眉をひそめるほどであつた、其の「神書覺書」の如き、好い一例であらう、猶其の他「絶纓自解」などいふものをも著はした位ゐ、月に賦し花に詠ずる道はなかなかに深かつた、彼は早くよりして和歌に趣味を持つたので、彼の葛岡修理太夫といふ人の門に學び、數々見るべきものを詠じ出したといふ、其の

橋雪

旅人も道は迷はじ水の上に
雪一筋の勢田の長橋

夜雪

ふり積るほどぞ知らるゝ若竹の
伏見の里のよるの雪折

などは有名なものである。其の他俳句などにも手を染めて、號を竹平と稱し、

大高子葉や富森春帆等と共に、水間洗德に就いて育を受けて居たといふことである。

斯く文武二道に達して居たばかりでなく、彼は又兵學を修めて戰史を講じ、治亂興敗其のよつて分るゝ所を明に述べ、以て天下一朝事あるの日、爲めになす所あらんと心掛けて居た、其の學識といひ、素養といひ、優に新知百石以上の値手は確かにあつたのである、併し弓は袋に太刀は鞘の當時にあつては、明盲が餘程多かつたと見えて、遂に五兩三人扶持といふ、潰し直段で買ひ取られて居たのである、否や召し抱へられてゐた。所謂千里の馬あつて伯樂なきを如何とは、將に當年與五郎則休を指していふべきであらう、それで彼が赤穂の藩に事へてから丁度五年、卽ち元祿十四年の彌生の春、人は花に醉ひ酒に狂ふのとき、彼の凶變は突として起つたのである。で、多くの家老、用人扱は番頭などの人々が金に目くらみ逃支度をなして居るの際、僅かに五兩三人扶持にして、加ふるに仕官して

から足掛五年がほどしか經たぬ神崎與五郎則休、去つて何處へ行かふと誰一人尤むる者もあるまいに、一度質を委ねて人に事へ、其の粟を食まんか、爲めに其の人の事に死せんのみとばかり、奮然蹶起意を決したる彼は、勇躍して同盟に就いたのである、それより後の彼といへば、唯是滿身忠ならざるはなく、義ならざるはなきの有樣、既にして彼は內藏介より讐家の動靜偵察といふ重大なる任務を受けて十五年の三月、京都を出發した、此の行もとより虎穴に入つて虎兒を探ぐるのそれであつたから、彼も亦深く心中に決した所あつたらうが、猶且彼は綽々たる餘裕を胸中に蓄へ、以て行く〳〵眼前の景物を歌と化しつゝあつた、卽ち、

逢阪を越ゆる頃花を看て
逢阪や山さくら戸の開くより
關とは花の名に匂ふらん

又、

富士の雪殊更深く、麓の花白らみあひて、いとめづらしく侍るを

消えかゝる富士の高嶺の白雪を
我世の連とゆく〳〵ぞ見る

宇津の山にさし掛りて

宇津の山うつればかはる色見えて
若葉をわくる蔦の細路

函根を越えて

富士の嶺を見つゝ越ゆれば花に明くる
函根の山に殘る白雪

斯くて四月二日、滯りなく江戸表に到着したので、與五郎則休は同伴の前原伊助と相議し、吉良邸の裏門に近い本庄二ッ目相生町三丁目には伊助が店を持ち、麻布谷町には自分が別に一戸を借り受けて、美作屋善兵衛と稱し、各々分業にて

上野介の出入りから、敵營の秘密まで、遺る隈なく注意して、其の探索を怠らなかつた。

話が少しく後へ戻るが、彼れ與五郎則休が關東下向の途中、函根を越える際に馬喰の丑五郎といふものに喧嘩を吹き懸けられて、詫證文を取られたといふ話がある、それは丁度與五郎が三島の宿で晝食をしやうと思つて、兎ある立場茶屋に入りこんだ、

「許せ」

「へエ入らつしやいまし、何うぞお上り下さいまし」

「イヤ晝食をつかふだけであるから上つても居られん、何うか出來合つたもので宜いから、飯を出して貰ひたい」

「畏こまりました、併し其處は何でございますから」何卒此方へお上りなさつて」

「イヤ其の儀には及ばん」

と、與五郎縁端に腰を掛け、荷物を傍に差し置いて只一人、頻りと食事をして居る、處へ這入つて來たのは年の頃四十格好、色の眞黑い、頭の毛といつたら棕櫚箒のやうに搔き亂して、襦袢一枚に繩の帶をしめ、片々が白足袋で片々が紺足袋といふ、其の上へもつて雲助草鞋を穿いて、醉つてゐると見えヒヨロ〳〵しながら撞かと縁に腰を落した男、

「オイ番頭さん、一杯飲ましておくんなせえまし」

「ヤア誰かと思つたら丑か、今時分來てば困るぢやアねへか、何處の家だつて今頃は丁度忙はしい時だ、モット後で來るが宜いや」

「何だつて、エ、オイ番頭さん、冗談いつちやアいけねへ、何時來やうとも此方の勝手だ、お前の家は酒や肴を賣るのが商賣だらう、錢を出して買ひに來たのに文句はあるめい、エ、オイ、雲助の錢だつて、ヘン、一文は一文に通用が

出來るんだぜ、そんな事をいやアがると、此の入口へ寢てしまふぞ」

「オイ〳〵、そんなことをしちやいかねへよ、エ、いかねへつたら」

番頭も困つて頻りに是を止めて居る、すると此の家の亭主と見えて、

「瀧藏や、丑が又來たんぢやアねへか、邪魔にしねへで一杯のましてやれ、なア丑、手前一杯のんだら行けよ、門口でゴタ〳〵するとお客樣の邪魔になるからな」

と、面倒だと思つたか、體よく一杯のまして追出さうとした、と是を聞いた件の男、飲めると思ッたのでモウ大喜び、

「成るほど旦那、お前さんは商賣上手だ、さう旦那のやうに事を分けていつて下さりやア何もいふ處はねへが、突然何故今時分來たんだと劍突を食ッちやアいくら丑だつて默つちやア居られねへ……イヤ是アどうも有難う存じます、オ、番頭さん、氣に障ッたら勘忍してくんな、ア、どうも有難え、良い酒だ、玆

の家の酒が良くッて旦那が愛嬌、繁昌する筈だて、ウ、宜い心持ちだ」
と、大きな鉢へ注いで貰ッた酒をガブ〳〵やりながら、傍を見ると與五郎が今食事を終つて茶を呑んで居る處、まだ膳の上には少しあまつた肴があるので、無作法にも突然二本の指で挾みながら、
「オイ旦那、酒の肴にするのだからお呉れよ、お前さんは飯を食つてしまつたらもういらねへんだら、うお呉んなせいよ」
言はれて與五郎、行儀の惡い奴もあるものだと驚いて、思はず苦笑し、
「欲しければ殘らず持つて參れ」
「有難え、流石お武家様は別だね、氣前が宜いや、欲しければ殘さず持つて行けつてアッハッハ……全體旦那は上りかね、それとも下りかい」
「是れから江戸表へ參るのぢや」
「江戸へ行く、それぢやアお下りだね、先の宿まで、何うですい馬に乘つてく

れませんかい」
「なに……」
「馬に乘つてお呉んなせえな、安く乘せらア、三里の丁場を二百ばかりで行かふぢやアねへか」
「イヤ、其の親切は忝けないが、まだ足疲もいたさんから馬の入用はない」
「そんな事をいはねへで乘つておくんなせえな、二百で高えと思つたら無賃で行きやしよう、私チも此の街道で顔の知れた馬士だ、あの野郎は行きの仕事はするが、歸りは何日でもからみで來るといはれちやア氣が利かねへ、無賃で乘せてもお客様を連れて居れば仲間の手前、鼻が高けえといふもんだ、ねえ旦那、一ッ乘つてお呉んなせえな、若し無賃でも高えと思つたら私の方で二百出さア、ねえ旦那、宜うがせう」
「ナニ足疲れもいたさんから、又今度にでも……」

「オ、旦那、なんだつて又今度にするつて、箆棒めへ此の次まで待つてる奴が何處にあるもんでへ、エ、オイ旦那、乗れつたら乗つてくんねへな」

「イヤいらん」

「そんな事をいはねへでよ乗つてくんねへつたら」

「イヤいらんと申すに、無禮をすると其の分には捨て置かんぞ」

「なんだつて、無禮をすると捨て置かん、無禮なんざア働かねへや、お前さんが厭だといふから厭なら無賃で乗せるといつたんだ、分つてるぢやアねへか、ねえ旦那、私チの馬ア奇態だぜ、毛が生へて居て足が四本あるんだ、それでも歩くんだんぜ」

「歩くのは當然ぢや」

「だから乗つてお呉んなせえな、厭だといはねへで是非乗つて貰ひてえ」

「無理な事を申すな、拙者は馬が嫌ひだから乗らんわい」

「何だつて、サア勘辨が出來ねへ、オイ武士、イヤ斯ん畜生、言ふことに事を缺いて馬が嫌ひだとは何だ、百姓や町人なら馬が嫌ひだといへば、其れはお惡ふござい ましたとお辭儀もするが、武士の癖に馬が嫌ひだで濟むと思ふのかい、飛んでもねへことを吐しやアがる、此の駄武士め、サア馬が嫌へだといつたからにやア勘辨が出來ねへ、野郎どうするか見ろ」

と拳を固めて打つて懸るをヒラリとかはして、

「汝れ無禮なッ」

と思はず一刀の柄に手が掛つたのを見るや、

「何をするんでへ、オヤ、此奴刀の柄へ手を掛けやアがつたな、斬らうといふんだらう、サア斬られやう、此奴は面白くなつて來た、道中を瞞着すために鈍刀を差して來たんだらう、汝の面を見ると武士ぢやアねへや、旅役者が其の儘だぞ、道中を爲難いと思つて、武士の姿に化けて來たんだらう、サ頭巾を取つ

て挨拶をしろ、箆棒めへ、只の雲助たア譯が違はア、東海道三島の宿で馬喰ひの丑五郎たア乃公のことだ、唯さういつても分るめへが、三年跡に下宿の立場茶屋で酒を飲み、繋いで置いた馬を引つ張り出さうとした時に、馬めえ腹を立ちやアがつて乃公の肩へ喰ひきつアがつた、それから癪に障つたから、家へ歸つて馬の股を剉いで喰ひ、前の敵討をした、其の時から馬を喰つたといつて、馬喰ひの丑五郎といふ異名を取つたんだ、お前みたやうな駄武士に脅かされて、御免下せへと詫まるんぢやアねへ、サア斬るなら切つて呉れ、斬られて赤え血が出なけりやア、錢は取らねへ水爪野郎だ、頭から斬るとも、尻から斬るとも何處からでも斬つて呉んねへ、ヤイ物をいはねへかい、此の畜生ッ」

と與五郎の胸倉を押へた亂暴狼藉に、赫となつたる彼れ則休、あはや一刀抜打に丑五郎を其處へ切り倒すかと思ひきや、流石は内藏介が目に適つたる武士だけあつて茲が堪忍の仕所大事の前の小事と、飜然悟るや否や、

「コレ馬士、大きに拙者が惡かつた、馬は嫌いだといつた段、一言の申し譯もない、何とぞ許して呉れ、斯くの通り詫まるから」

「態ア見やがれ、乃公の權幕に驚きアがつて詫まるなら堪忍もするが、只堪忍は出來ねへ地面へ兩手を付いて詫まれ」

「よし〳〵、其の方の申す通り斯樣に大地に手をついて詫び入るほどに、何卒是にて堪辨をしてくれ」

と、五尺の男子が大地に兩手をつき頭を下げて詫び入つた。

「アッハッハ……態ア見やがれ」

と、丑五郎猶も惡口いひ〳〵、あらうことかあるまいことか、與五郎が横鬢のあたりへカーブッと許り痰を吹きかけた。是には流石の與五郎もムッとなつたが茲ぞと逸る心を押し鎭めて其の儘に頭を下げてゐる。すると益々圖に乘つた馬喰ひの丑五郎、

「どうだえ見物、見てくんねへ、いくら武士でも、斯うなつた日にやア態アねへや、此の丑五郎に遇つちやア宛然犬ッ子同様だ、ヤイ武士、まだ勘辨が出來ねへぞ」

「何故勘辨が出來ぬ」

「何故出來えへといつたつてよ、只詫まつた許りぢやア證據がねへ、馬が嫌ひだといつたのは誠に申し譯がございませんといふことを書いて遣せ、詫り證文を出さなけりやア勘辨が出來ねへ」

「詫證文か、然らば望みに任せ認めて遣す」

與五郎も仕方がないから矢立を取り出し、鼻紙へサラ〳〵と認めた一通、

「サア是で勘辨いたせ」

「ウム、もう書きやアがつたか、早え奴だな」

と馬喰の丑五郎つく〴〵見てゐたが、

「いけねへ〳〵、是ぢやアいけねへつて事よ」

「それでは氣に入らんか」

「氣に入るも入らねへもねへ、乃公の知らねへ字ばかり集めやアがつて、斯んなものが分るけへ、斯りやア皆な乃公が手習ひをした後で出來た字だ、こんな六ケ敷書きアがつて、馬鹿にするねへ、どうせ書くなら乃公の知つてる字で書いてくれ」

「其の方の存じて居る文字といふは」

「ソレいろはにほへとよ」

「ア、假名だな、承知した」

と與五郎其のいふなりに再び書き直した一通、手に取つて讀んで居た所の丑五郎め、流石に與五郎の手跡に感心したと見え、

「旨く書きやアがつたな、何だつて、一ッあやまりしようもんのこと、ウム旨

く書た又一ッと書きやアがつたな、むまはきらひだとまうしさふらふは……ヤイこん畜生、むまとは何だ、馬なら馬と書け、人を馬鹿にしやアがつて……」

「イヤむまと書いて馬、別段其の方を馬鹿にした譯ではない」

「ヘン旨くいつてやアがる、マアそれは宜いとして……さう〳〵、ヤイこん畜生、ちう〳〵とは何でへ」

「それは濁りが付いてゐる、ぢう〳〵だ」

「ウム、重々か、そんなら勘辨してやる、エ、とそれから、何だと、むまくらひのうしごろうさま、かんさけよからう、こん畜生、いよ〳〵勘辨が出來ねへ、乃公が冷酒を呑んだものだから、かんさけよからうだつて吐しやアがつかな」

「イヤ、左樣ではない、それは神崎與五郎と讀むのぢや」

「僞を吐け、神崎與五郎とは書てねへぞ」

「よごらうと書いて與五郎、うしごらうと書いて丑五郎だ」

「ウム、旨く瞞着しやアがつたな、マア宜いや是だけ取つてやりやア、さア是で勘辨してやる、氣をつけて行け、峠もありやア川もあるんだ、どじを踏んで怪我でもするな、命冥加の駄武士め、態ア見やアがれ」

と、又もやカッと痰唾を吐き掛けてのセ、ラ笑ひ、與五郎も仕方がないと詮めて、今は少しも怒る氣色なく、晝食の代をそれへ置き、

「大きに手數をかけて相濟まんことをいたした」

と傍にあつた荷物を取つて肩にかけ、其の儘其處を立去つて、僅かに此の場を逃れたといふ、是が所謂「神崎與五郎吾妻下り堪忍袋の一段」である、併し是は其の實大高源吾が馬士の國藏といふものに强請られた誤傳であるといふことである。

扨も彼れ與五郎則休が麻布谷町に一戸を借り受けるや、折柄夏にむかつたことゝて、彼は早速扇子團扇などの行商人に變裝して、上野介が隱れ居るといふ噂の

ある上杉家の麻布下屋敷のあたりを賣り歩いた。斯くて一意專心、探り得た所の情報は一々山科なる内藏介が許に報告せられつゝある間に、内匠頭の舍弟なる大學氏の左遷となり、京都の圓山會議となり、次いで潮田又之丞の一黨總討入決議の注進となつて、江戸表へ下つて來たので、當方面の上將吉田忠左衞門兼亮は主人となり、此の歳八月十二日、觀月の宴に事寄せて堀部彌兵衞父子、奥田孫太夫父子、片岡源五右衞門、磯貝十郎左衞門、神崎與五郎、前原伊助、杉野十平次倉橋傳助、近松勘六及び潮田又之丞等の面々凡そ二十人ばかり相集り金龍山下より船を出して欸乃聲々、徐ろに中流へ漕ぎ出づるや、舟中に秘密會議は開かれたのである。

清風涼々、遙かに富士と筑波を左右にする所、細漣皺みては又伸び、伸びては又皺む其の樣に、涼味忽ち心身に湧いて一黨の諸士盃を廻すこと多々、やがて一座陶然となるに及び各々詩を賦し歌を詠じて又他事なきが如し、ト與五郎則休、

直ちに筆を取つて神に落す所、詩となり歌となつて見はれたは、

おなじ心なる人々誘ひ、八月十二日墨田川の逍遙にまかりて

鳥の名の都の空も忘れけり
墨田川原に澄む月を看て

月前の友

てる月の圓かなるまにまとゐする
人の心のおくも曇らじ

舍盟

聞說我州元勇州　楯山堀海蓋酬仇
一人積惡逼千恨　天地神明罰賜矛

さるほどに一切の協議は盡く纒つたので、再び麻布の家に歸つた與五郎、此度は前原伊助と一緒になつて本所に移り住むことゝなり、玆に伊助は米屋五兵衞と

稱し、與五郎は小豆屋善兵衛と變名した、小豆屋といつても小豆を賣るのぢやない、鬢付油だとか櫛だとか、そんな物を脊負つては、

「鬢付の御用はありませんか」

で朝から晩まで賣り歩き初めた。或る日の事などは、大膽にも吉良邸の門番の隙を見澄して裏門からノソ〳〵這入りこみ、長屋〳〵の臺所口を覗いては、

「鬢付の御用はいかゞさまで」

をやらかしながら、敵邸の樣子如何にと本職の偵察に取り掛つた所を、忽ち門番に發見され、すんでの事に危なくなる處を、ホー〳〵の體で逃げ出した事さへあるくらゐ、熱心に其の探索を事としてゐた。

併し流石は情の人として、其の間にも折々は故郷の兩親を思ひ出しては、行く雁に其の思を走せた事もあつたと見え、「月前初雁」といふ題で、

故郷の空に傾く月影を

見よとや夜半の初雁の聲

と詠じて徐ろに望郷の涙を注ぎもした。又ある時の如きは、

九月十三夜

露の身の浮世の風に漏れて又
長月の名の月も見る哉

と詠じてみたり、或は

九月十八日は、我うぶすな美作德守の宮の祭日にて、昔は必ず珠纓に月など待ちつるに、遠き東に侍れども、心に籠めて、祈る事のありければ、

海山は中にありとも神垣の
隔てぬ影や秋の夜の月

などゝ咏み出でゝ復讐の成功を祈り。又或る時の如きは、

淺草眺望

墨田渡口待船休　農舍繁榮春稻秋
梅若墳楊似帝土　業平詠草唱皇州
龍山日沒梵鯨響　牛社月登華表幽
回首酒旗風颯々　囊錢空盡拭涎流

と賦して、酒好の嘆を洩らしなどした、まこと、彼は豪放磊落、酒といへば、斗酒をも辭せず、四十七人の義徒中にあつて、恐らく大酒家の隨一であつたらうといふ、其の優美な文心を有する點から、是を見れば實に一奇といはねばなるまい。彼が同族神崎藤五郎といふ人の許に寄せた書中に、歴々と其の意味が見える即ち、

愈々討入の期も近々と相成り候へば、最早貴殿と再び盃を擧げるの時も御座あるべからず候、此地は酒の價甚だ高く、浪々の身にては思ふ存分に飲むこと

も相成り兼ね、是のみ遺憾千萬に候、去りながら朋輩の衆笑止がり、絶えず酒を惠み呉れ候により、幸ひに盃の手を離れ候日もこれ無く、兎にも角にも、酒の德ほど廣大無邊なるものは御座なく候、貴殿には御親族多き御事故、折角御睦みなされ、御疎情これ無き樣祈り候、以上遺言とも御見做し下され度候、

是で見ても、如何に彼が酒好であつたかといふ事が分る、實に酒は彼が生命であつたのだ、さればこそ、前にもある如く、淺草眺望となつて、空しく酒旗の風に颯々たるを見ては涎を唾れ流すやうな心も起るのである。

それほどであつたからして、彼は又なかなか下情に通じて、客扱ひが上手であつた、其の前原伊助と同居して商を始めるや、彼は多くの婦女子を相手にして、種々と是にお世辭を振り撒き、容易に逃がすやうなことはなかつた、彼の若い衆の九十郎事實は岡野金右衞門が、當時此の店でもつて吉良家々中の召使なる一少女と慇懃を通じ、戀の緣の絲を手繰り手繰つて、敵情探索に一歩を進めたのも、

内實は此の與五郎則休が手段的發言かも知れぬて、で、其の爲めかあらぬか、彼は一日時雨に事寄せて、

同志の者の初戀をよめる

神無月しぐるゝ風はこゆるとも
同じ色なる末の松山

と詠み棄てた事もあつたといふ。

彼は又、晝間人の出入りするのは商賣だから宜しとはするものゝ、夜間同志の士が繁々と寄り集ふは至極の危險、若しも讐家の注目を引くやうな事もあらば一擧の一大事と思ひついたので、忽ち茲に一工夫に及び、何時何處で習ひ覺えたものか、自ら發企して此家に土場を開張し、丁よ半よで夜を明すことが間々あつたそれだから當時茲に集まる者といつたら、町人はおざれ、破落漢はおざれ、扨は折助小厠はおざれ、何でも彼でも澤山寄せ集めて丁半を戰はしめ、以て同志の士

の參集に便を與へたといふ。彼の青山延光が則休の傳を草して、

良雄既に江戸に至り、數々則休が舍に會す、則休人の爲めに疑はれんことを恐れ、時に或は市井の惡少を聚めて樗蒲せり、故を以て人の疑ふ者あること無かりき」

といつたのも卽ち是であらう。

斯くして敵情を探偵しつゝ、着々一擧の歩を進め來つた、一日彼は豫て手懷け置いた小林平八郎が仲間より、吉良邸十四日の茶會を聞き出したので、占めたと許り此の旨内藏介が許へ報告する、恰も好し時に大高源吾も亦、其の由を探り得て内藏介がもとへ知らせ來つたので、一擧決行の議は立ち所に定つた。さるほどに、愈々其の日となれば彼れ小豆屋善兵衞の與五郎則休は勇氣滿々威風凛乎として四邊を拂ひ、

梓弓春ちかければ小手の上の

雪をも花のふゝきとも見ん

と和歌一首、口ずさみつゝも乘込んだる吉良家の表門、勇みに勇んで屋の棟を此方に踰える時、脛を沒する積雪に思はず其の足踏み滑らして、地上に堂と顚り落ち、身には僅かながらも打撲を受けた、併し流石は豪氣の彼れ、何是しきの事がといふ面持して其の儘戰鬪に入り込み、同士の早水藤左衞門滿堯と共々各々弓を取り、敵の現はれる者を見掛けては、箭頃を計つて射出す其の弦音其の箭鳴、四邊を驚かして尠なからず敵膽を寒からしめたといふことである。

斯くて目出度く本懷を達するや、彼れは間十次郎以下九人の人々と共に水野監物に御預となり、翌年二月の四日、田口安右衞門が介錯にて美事切腹してのけた、時に年三十八、法號を「及利敎劍信士」といつて、泉岳寺境內南方から北面する所、第九番目の一基がそれである。

茅野和助常成

茅野和助常成は、美作の產で、彼の神崎與五郎と同じく、森伯耆守長武に事へて居た武士である。伯耆守が死んでから、其の世嗣の問題で主家に紛擾が起り、遂に斷絕するの不幸に遭遇したので、餘義なく與五郎と共に、赤穗へ流寓して居たのである。其の中に此の事が內匠頭の耳に入つたので、君侯は士を好むのあまり、兩人の氣節を嘉みせられて、同時に各々五兩三人扶持で召抱へられ、徒步橫目に擧げられた。

斯くて殆ど棄て賣り的な値段であつたにも拘らず、彼は所謂意氣に感じたものか、忠實に自分の役を勤め居る中、僅かに四年にして彼の事變が起つたのである實に數奇の武士であつたのだ。それで當時彼は江戶表に在勤して居たものと見え、最初の同盟中には其の名が見えなかつたが、後幾ばくもなくして、義を金鐵の堅きに比するの身となつた。爾來、京洛の巷に上つて、關西方面の同志間に種々奔

走する所あつたが、再び十五年の九月、大石主税が東下するに從つて、江戸表の人となり、富田藤五或は町人助五郎といふ假名のもとに、盛んに活動しつゝあつた。

彼についても亦嘘八百の珍傳が隨分流布してある、一例をいへば、萱野三平重實、卽ち一擧の決行せられるゝズッと以前、哀れな最後を遂げた其の人と、彼とが兄弟であるなどゝいふのがある、茅野と萱野、音が相通ずる處から、そんな間違ひが起つたのであらう。

兎にも角にも、僅か五兩三人扶持の微々たる侍であつた常成が、此の前代未聞の快擧を共にしたといふに至つては、たゞ〳〵感ずるにあまりありといふべきである。

「士は己を知るものゝために死す」此處に至つて始めて明かなりだ。

彼や行年三十七才、水野監物が家臣値賀又藏の介錯によつて、美事内匠頭が意

氣に死した、其の法號は「刄響機劍信士」。

片岡源五右門高房

春三月の月半ば、黄昏の空は曇晴として、散る花も今は色褪せた玆芝愛宕下なる田村右京太夫の庭上椽先に、社祢を着し、福草履を穿いた、一個の凛然たる武士が平伏して居る、其の目は何故か血走つて、いふにいはれぬ苦悶の樣が歷々と浮んでゐる、と此の時一人の男、身には同じく社祢を着けてゐるが何所となく犯し難い、氣品自ら備れる樣子で靜々と其の椽先に現はれた。

以前の武士は、一目此の姿を見るや、

「ハッ」

とばかりに平伏して、はや胸塞がつたか、堰來る涙止めもあへず、差俯向く、

と、

「よく尋ね參つた」

と上なる人は只一言、後に續く言葉もない、やがて差俯向いてゐた件の武士は、涙に洗はれた顔をッと上げて、懐しげに其の人を見やつた時、兩者の目と目は相合した。

上なる人も語らぬ、下なる者もいはぬ、二人は唯無言、竝み居る人々も皆聲を呑んで、唯一人此の二人を仰ぎ見る者はなかつた。

と、それも暫し、上なる人は別れともない思ひを殘して、悄然足を運び去らんとする折、

「お心靜かに……」

との震へた聲音が、下なる武士の口より洩れたぎり、後はたゞ寂然、心なの花が二片三片ハラ〳〵と地に布いた。

そも此の光景は何を示したのであらうか、時は元祿十四年、勅使御饗應係の一

人たりし淺野内匠頭長矩は、此の日殿中に於て吉良上野介に對し刃傷に及んだが爲め、田村右京太夫に御預となつて切腹仰せつけられた。

是よりさき、其の家臣にて内證用人兼兒小姓頭たる片岡源五右衛門高房は、今日主君の登城に扈從して大手下馬先に供待をして居る處に、殿中の凶變が紫電の如く閃傳し來つたので、是はお家の一大事、片時も猶豫なり難しと、直ちに汗馬一鞭、築地鐵砲洲の藩邸に驅け戻り、事變を家中の面々に傳へた後、筆を呵して一片の報告書を草し、之を赤穂へ卽刻早打として注進せしめ再び取つて返して更に芝の田村邸に馳せつけて、君侯の身の上如何にと伺ひ出た。すると事は既に休した、同邸の藩士は源五右衛門に面接して、

「御氣の毒ながら内匠頭殿には、お預け後間もなく、御切腹の御沙汰下りまして、つい先程御遺言の趣も書取にいたし、既に御檢使のお許しも得ておざればそれを御傳へ申しませう」

とて、長矩が臨終の一首、

風さそふ花よりもなほ我はまた
　春の名殘を如何にとかせん

の書取を示されたのである。

源五右衞門は是を見て、泣かんにも今は涙も出でず、暫時茫然として自失したかのやう、やがて戚然口を開いた彼は、取次の士に向つて、

「私事は是まで主人左右に近侍いたしたる者におざりまする、重き御仕置の御場所に恐れ入つたる次第ではおざれど、主從の暇乞に唯一目、主人に面會いたしたう存じまする、此の義御免下されまするやう、折入つて御取次を願ひまする」

と申し出でた。

其の願ひ、今の場合にあつては無理ならぬことであるから、取次の士も默止難

く、是を主人右京太夫に取次いだ、右京太夫も流石に人である、人情の何たるかを解するの人であつたから、直樣此の旨を檢使の人々に告げた上、其の願ひを聞入れて許しやつた。源五右衞門は非常に喜んで、扨こそ前にいつた如く其の庭上に座して、是を最後の面會を長短に遂げたのである。

彼は尾張の國の產、祖父を熊井藤兵衞といつて、曾て淺野采女正に事へ、二百石を食して武具奉行を勤めて居たが、淺野の宗家藝州侯の息女が、尾州侯に御入輿の折から、藤兵衞の子十次郎重房といふもの、其の御附人として選まれ來り、終に德川家の藩臣となつた。此の十次郎に二人の子があつた、長男は父祖の稱をついで藤兵衞次房といひ、次男は赤穗の藩士片岡六左衞門の名跡を嗣いで、源五石衞門高房といつた、是が卽ち義黨の一人となつた其の人である。

彼は生れながらにして美貌、夙に美少年を以て稱せられた、ために內匠頭は深く彼を寵用せられ、近習から次第〳〵に擧げ用ひられて、遂に其の祿三百五十石

とまで增加し、內證用人兼兒小姓頭に任ぜられたのである。

凶變當時、彼は前にいつた通り、唯一人、其の主君と臨終の別れをなしてから卽夜、磯貝十郎左衞門と俱に其の遺骸を泉岳寺に送葬して、髻を斷ち切り復讐の一事を深く心中に決したのである。そこで直ちに彼は十郎左衞門ともく、相伴うて赤穗に下向し、內藏介に會つて其の意のある所を披瀝し、復讐の擧を促したのである。併し當時はまだ藩論區々として容易に決しかねて居た際とて、內藏介もオイソレと同意し得ず、かたく此の兩人とも年少の故を以て、人々が聊か疑ひを存じて居たことゝて、其の說く所に耳を傾ける者殆ど無きの有樣に、源五右衞門、十郎左衞門の兩人は大いに失望し、

「城に嬰つて討死するも、敵に向つて斬死するも、君國に殉ずるの義は一つである、此の上は各々其の志をなすまでゝおざる」

と言ひ切つて、悄然江戶へ引返した。是がために、彼れ等兩人は當初の同盟に

は連らなかつたのである、のみならず彼れ等は、彼の在府の急進派堀部父子、奥田親子等とは又一肌變つた所があるので、兩々相容れず自ら別動隊の觀があつた、しかしその忠義の一念に於ては、同じく金鐵の勇士であつたことは云ふまでもない。

兎角して居る中に、國表の評議も愈々決して、內藏介の意又復讐の一事に傾き來つたので、源五右衞門、十郎左衞門の兩人は卽刻其の一味に加はり、共にく力を盡して事を行ふに決したのである。是に於て彼れ源五右衞門高房は、諸般の打合せ傍々、單身京都に上つて伏見に來り住んで居つたが、快擧の期も追々に近づいたので、妻子を其處に振り棄てゝ、東海道に押下つた。其の途中、彼は餘所ながら訣別の意を表しやうとて、尾州名古屋の生家に立寄つた。此處には實父の熊井十次郎が猶壯健に暮し居つたからである。

「父上、久々にて源五右衞門伺ひましておざりまする」

「オ、、其方は源五右衞門か、よう來やつた、珍らしいの」
「ハ、ッ、父上には何時も〳〵御健勝にて源五右衞門祝着に存じまする」
「ウム拙者もまア此の年まで何の變りもないて、其方も無事か、結構なことぢや、サ、、もつと此方へ寄れ」
「有難うおざりまする、實は折々御機嫌を伺ひまする筈の處、昨年以來の浪々にて尾羽打枯らしましたる體を、御覽に入れまするのも何とやら心憂く、つい夫故御無音勝に打過ごしまして、何とも申譯がおざりませぬ、幸ひ此の度は江戸表にて仕官の途にありつく事に成りましたで、下向の途すがら、御暇乞かた〳〵御機嫌伺ひに參上いたしましたる次第におざりまする」
「源五右衞門、何ぢやと、今一度申して見よ」
何かは知らず父の十次郎は早くも聞き尤めて、高房の面をヂッと睨み詰めた、そして聲も荒々しく、

「白痴たことを申すな、武士が貧乏したとて何の恥づる處あらう、其方も熊井の家に生れ、片岡家を相續した身、殊に故内匠頭殿からは並々ならぬ御目をかけられた者ではないか、主恥かしめらるゝ時は臣死すとの大義ぐらゐは辨へ居るべき筈であるに、二君に事へて利祿を貪らうとは、見下げ果てたる其の根性、目通りするも心苦しき奴其處立て」
と、何がさて義に堅い父十次郎、言ひ棄てゝ其の儘奥へ這入つてしまつた。源五右衞門も是を聞いて、
「實は其の義に就いて、斯くお目通りを願ひましたる事ではおざれど、假令、親兄弟たりとも明し兼ねたる一擧の始末、互に他言はせじと神かけて誓つた手前ゆゑ、心ならずも右やう嘘僞を申しましたる次第、何で忠義の道を忘れませうや、不肖源五右衞門も熊井の血統を承けたる身、さる不道なことおざりませう」

と云ひ譯したいは山々であるが、いはれぬ今の場合、唯ハッと平伏したまゝ泣きの涙で悄然此處を後にして、心中ひとり永訣を告げたのであつた。しかし流石は兄弟、兄の藤兵衛も源五右衛門が表面の言葉に、不滿は懷いたものゝ、兄一人弟一人の間柄、友愛の情は亦格別で、密に其の後を追うて高房を暫時送つたが、

「何處まで行つても名殘は盡きぬ、さらば此處にて別れやうほどに、隨分と壯健に暮らすが宜い」

と、やがて兄藤兵衛は源五右衛門と袂を分つたが、思へばそれが兄弟生き別れであつたのだ、其の別れる際に、高房は兄に向つて、

「父上の御怒りに觸れ、何とも面目次第もおざりませぬ、しかし他日お詫の協ふ時もおざりませうから、お歸りになりましたらば宜しくお執成のほどを願ひまする、それにしても、人間は老少不常とやら、何時如何なる處にて相果てまするやら、又此の儘にて再度御目に掛り得ぬやも計り難うおざりますれば、私

と思召して是をお納め下さいまするやう」

と暗にそれとなく佩刀の小柄を取つて兄に送り、涙ながらに右と左に足を向け去つた。それにしても父十次郎の怒りは容易におさまらず、藤兵衛が高房を道に送つたと聞くや、

「父が逐ふ者を、兄が送るとは何事だ、怪しからん奴、汝れも源五右衛門と同じ心か、白痴者め、其の義ならば貴樣もとも〻〻勘當するぞ」

とまで敦圍いたので、

「お腹立のほどは御道理至極でおざりまするが、それにしても彼れの樣子、仕官するとしては如何にも腑に落ちぬ處おざりますれば、暫く彼が擧動を御覽なされた上で、御成敗なされても遲うはおざりますまいと存じまする、何卒今すこし御憤りを抑へ下さるやう御願ひいたしまする」

と諫めて、僅かに其れを慰めて居たくらゐであつた。

實に當時の源五右衛門の心中、さこそと思ひやられて憐れであつた。

斯くて彼れは江戸表に出てから、尾州の浪人で吉岡勝兵衛といふものであると自ら稱して、南八町堀は湊町に一家を構へ、盛に同志の人々と一致の運動に勤めて怠りなかつた、それと共に、彼は又矢頭、大高、貝賀、田中等の人々を自宅に同居せしめ、相倶に事を計つて居たのである。

それで復讐の際彼れは、表門から敵の邸内深く突き進んで、拔群の働きをなし大いに味方の者を助けたが、惜しや、翌年公議の御沙汰によつて、細川邸内に自盡して相果てた、時に年はまだ三十七才であつた、其の介錯を引受けた人は、二宮新右衛門といふ士、法號は「又勘要劍信士」といふ。

横川勘平宗利

横川勘平宗利は、讃州丸龜の富豪横川勘右衛門の從子、夙に赤穂藩に事へた節

義に富める武士であつた。彼は身材魁梧、勇力人に超え、打物とつても手だれの達者で、殊に角觝は聞えた取手であつたといふ、併し當時太平の御代にあつては可惜好漢も世に知られず、空しく五兩三人扶持を賜つて、徒歩侍の賤役に甘んじて居たのである。それで主家凶變の際彼は、城下から一里ほど隔つた地にある鹽硝庫の守衛として在番し居つたが、此の凶報を耳にするや否や、直に赤穂を指して馳せつけ、

「拙者も籠城の列に御加へ下さるやう、身命にかけて御願ひ申す」

と申出た。しかし當時はまだ藩論紛々、徒らに甲論乙駁して評議に評議を重ね居つた際とて、

「其の志は甚だ奇特の至りではあるが、愈々籠城とも定れば、鹽硝は第一の戰備品ゆゑ大切に護衛いたし居るやう」

といはれて、勘平心ならずも其の儘引返して、呼出しの來るのを今か〳〵と待

つて居た、爲めに最初の神文連名の際の如き、其の場に召集もされず、姓名を列しなかつた。然るに其の中に藩論は本城開渡し、一藩退散といふことに決したので、是を聞き知つた勘平、何條默して居られやう、忠義の心血は沸々として湧き立ち、悲憤慷慨やるに處なく、遂に死を以て闔藩の士に猛省を促さんとした、事幸ひに内藏介の耳に入つたので、危ふく其の命は取り止められて一擧の一員に加へられることゝなつた。そこで翌十五年の七月、彼は一黨の士に先つて江戸表に下り、本所林町五丁目なる堀部安兵衛が借宅に同居して、三島小一郎などゝ變稱し、心力を盡して讐家の動靜に注目して居た。

一説には、當時勘平宗利は、芝新錢座の森大内記の留守居役、芹澤助右衛門宅に居つたともいふ、で其の家に二月三月世話になつて居る中に、助右衛門夫婦が彼を養子にしやうといふ相談を持ち掛けた、是には流石の勘平も弱つて、何とか逃口上をとも思つたが如何せん口不調法の田舍武士、まだ赤穂訛の二上り調子が

鼻へ掛る時分のことゆゑ、

「ハッ」

と行き詰つて急には返事も出來ない。然るに助右衛門の方では、身持の固い彼がことゆゑ何うかして話を纏めたいと思ふから、勘平の腹の中などは考へない、又勿論復讐の大望があらうなどゝは夢にも思はないから、

「別に考へも何もなからう、否やはあるまいが」

と門みかけて切りこんで來る、勘平も仕方がないから、

「イヤ、有難いことではおざりまするが、私もまだ少しく望む事もありますによつて……」

面倒だから助右衛門後まで云はせない、

「それは武士だもの、有るのは當然さ、だが壯年の空想といつてな、種々な考へも、まアあるものだが、一つ私の家の後嗣にはなつて呉れまいか」

「ハイ有難うはおざりまするが、其の養子になるといふ事について、全體其の拙者がまだ、左樣でおざる腕前が未熟でござるによつて、劍術槍術共に今少し覺えんければ、上のお役にも相立つまいかと存じ居りますれば……」

勘平、いふことも何も齟齬だ、それだけ助右衞門の方ではドン〳〵矢つぎ早の連發で、

「イヤ夫は勘平構んよ、大きな聲ではいはれぬが、太刀は鞘に弓は袋の治國太平の天下ぢや、武士だといふ看板に刀を持つて、其の拔きやうだけでも知つて居れば澤山の世の中、此の家中だからといふても、お主ほど腕前の出來て居るものは尠なからう、いや尠ない所か皆無といつても宜い位ゐのものぢや、何もそんなに劍振り棒振りを稽古するにも當らんわサ、マア養子と定めて置かうではないか」

と、伯父の助右衞門は無關係だから呑氣なことをいつてるが、勘平の腹の中は

何うして〳〵。

そこで氣が氣でないから勘平宗利、早速伯父の家を飛び出して當時石町に座敷借をして居つた内藏介良雄の處へ相談に及んだ。

「御城代、一大事出來いたして拙者誠に當惑いたし居りますれば、何卒宜きお智慧を拜借いたしたうおざる」

「ホ、ー、一大事とは横川氏何事でおざるかな」

「他の事でおざりませぬ、實は唐突ながら拙者身寄の者が此の勘平を養子にいたしたいと强つての望で……」

「ハ、、、、これは何事かと思うたら横川氏、貴殿を御養子にとか……それは結構ではおざらぬか、拙者も彼の芹澤助右衞門とか申す人は存じて居る、森大内記殿の御家中に於て誰しらぬ者もない留守居の古顏新參なれば隨分と其のお役も辛いとか申すことではおざれど、古參の養子になれば第一體が樂で、申し

たいことも充分にいへるし、此の上もない結構ではおざらぬか、それを其のやうに御心配めさるとは、横川氏、チト何うかなされたかな」

「ハ、ア、さては養子に相なつても差支へおざらぬと申すので……」

「さればサ、是までに工んだる一舉の次第も、貴殿御一人がお脱けなされたとて何も然したることおざるまいての」

「ナ、何でおざると、御城代、然らばこの勘平如き者は非ずもがなの御了簡にて……ウム、斯くある上からには是非に及ばぬ腹掻切つて冥途に赴き、先君にお目通り、さうぢや〳〵、御免ッ」

氣が早いから堪らない、庭に飛下りるが早いか片肌押脱ぎ差添引抜いて、其の儘腹を切らうとしたので内藏介も驚いた、冗談にいつたのを眞に受けられたのだそこで漸くにしてそれを押止め、勘平を手許へ呼んで、

「横川氏、早い假令が此の茶碗一つにても土を練り竈に入れ、物にするまでは

大分に骨折のかゝるもの、ぢやが是を破壞すとなれば、小供が參つて落しても それまでゞはおざるまいか、見易い道理で、何うか彼の家の養子に相成つて、兩親の氣にいるやうにと致すなら骨も折れやうが、嫌だ、好まない、破談にしたいと思ふなら、別段手間も暇も入るまいかと思ふが如何でおざる、と申すのも、貴殿に何等の道樂、いはゞ不埒の段々がなくて、今見る通り身持堅固なればこそ、養子にもいたさうと芹澤が望むのでおざらう、しかし其の勘平たる貴殿が人に知られぬ道樂があるとか、或は放埒があるとかすれば、話もそれまでゝはおざるまいかと拙者存ずる、貴殿何か道樂と申すやうなものおざらぬか」

「左樣で、道樂と申すと」

「是は困るて、人は嫌ふが自分には此の位樂みなことはないと申すやうなもの假令へば人に叱責されてもやりたいと申すやうな」

「なるほど、然らばおざりまする」

「ホ、ー、あるとな、何でおざるかな」
「他でもおざりませぬ、劍道と學問、これのみは人に何と申されても……」
「それはいかん横川氏、もつと碎けたもので」
「他にはおざりませぬ」
「貴殿、酒はいけるか」
「イヤ、樽柿とやら申すものにても、又奈良漬にても醉ふ事がおざりまする位ぬ」
「殼下戸か、それでは仕方もおざらぬな、然らば斯樣いたされい、定めるやうな斷るやうな愚圖〳〵にしてをかれては、其の中には又宜い工夫も出るでおざらうから」
といはれて勘平宗利、其のまゝに芹澤助右衞門方に厄介になつてる。然るに追〳〵と快擧斷行の間近くなるにつれ、勘平の目の色が變つて來た、と見るや助右衞

門もハテナと思ひ、
「扨は内藏介といふ智者も居る故、事によると吉良の屋敷へ討入つて、仇上野介の首でも擧げやうといふ、其の一味の内へでも加いつて居るかしら、多く得難い忠臣義士一人の甥の忠義を屈しさせる次第でもないか、今時には珍らしい人物の彼の勘平だ、既に主に忠を盡すもの、又必ずや我が身内に信義を盡さぬといふ者はない、然ういふ人間に死水を取つて貰へば安心だ……」
と女房にもいひ含めて、女の黑髮には大象も繫がれるといふ事があるから、若い女を一人、勘平に當がつてやらうと、方々の桂庵に賴んで置く、その中に傳手あつてやつて來たのがお花といふ若い美しい女だ、これを連れて來て、勘平に目見えをさせる、しかし忠義に凝つたる勘平の心は大盤石、ビクともせぬので、こそは如才のない助右衞門の女房、其のお花といふ女に向つて、
「お花や、お前、若旦那樣の氣に入つてさへ呉れゝば、此家の女房にもして上

げやう武家は堅くつて厭だといふなら、本家になつて町方へでも嫁入をさせて上げるから、何うか勘平さんの氣に入るやうにして下さいヨ」

と來たからお花も一生懸命、腕に縒をかけて隙を覗つてゐるやうな始末、勘平は是は困つた事が出來たと思つて居る、すると此方はそんな事とは知らないから雨の降る晩なんぞはお花の方から出掛けて往つて、

「若旦那恐しい雨で、お玄關の脇は怖くつて堪りませんから、濟みませんが何うか若旦那の假に寢かして下さいまし」

などゝ、寐亂れ姿の阿嬌な風して頻りにそれと思はせるは勘平宗利、木偶か金佛か、叩いても平氣なもの」

「さうか、それは可哀さうに宜いとも〳〵」

といふので、居ると思つて寢床を擔いで引越して來ると、勘平宗利ムックリ起き上つて、

「何も雨が玄關の脇ばかり降るといふ譯ではなし、拙者が是から玄關の脇へ行つて寢るから」

と夜半に引越しが初まる始末、何うするとも出來ない、その中に時期がますます切迫して來ると、勘平の擧動が愈々變になつて來たので、伯父の助右衞門が女房を呼んで、

「俺の居る時は勘平を出してもいゝが、俺の留守中には假令勘平が腹を切るといつても、他出をさせてはならんから左樣心得なさい」

と堅くいひつけた、それを勘平も内々聞きつけたので、是は何うも困つたと思つて居る。然るに時至つて十二月の十三日、此の日泉岳寺の寺評定には幸ひと助右衞門が家に居つたので出られたが、翌る十四日といふ千載一遇の日になると、助右衞門が朝から碁のお相手として奥へ上つてしまつたので、サアしまつたと思つた勘平、是は愚圖〳〵して居ると一期の大事、何でも朝の中に出てしまはない

と、出そびれると考へたので、コッソリ支度を調へ置き、自分は何氣ない風をして助右衞門が女房の前へ行き、

「お早うおざりまする」

「オヤ、是は勘平さん、大層早く支度をして、何處へかお出掛けかへ」

「ハイ、左樣でおざりまする、朋輩の勝田新左衞門が、備前岡山の池田公へ仕込をいたしまして、本日佐野郡へ出立を仕りまするので、一寸早川まで見送りたいと心得、お暇を頂きに……」

「往くといふのかへ」

「左樣で……」

「成りませんよ」

「ハー」

「家を出ることはなりませんよ」

「それは又なぜで……」

「なぜと仰しやつても、良人が留守の時には、例へ勘平が腹を切るといつても出すなと、堅くいひつけてお出でになつたから、決して出すことはなりません」

「ハー、しかしそれでは餘り朋友の信義といふものが缺けまするによつて、一寸内分で一時ほど……」

「いけません、病氣だといつて言譯をしてお置きなさいまし、病氣屆なら公議でさへ聞き屆けて下さるから」

「でもそれでは拙者が甚だ迷惑をいたしますれば」

「けれども出すなといふ云ひつけですから仕方がありません」

「宜けますまいか」

「宜けません」

仕方がないので勘平も其の儘スゴ〳〵自分の居間へ引返したが、思へば思ふほ

ど氣が氣でない、そこで又もや伯母の前へ出て、

「伯母さん」

「何です」

「誠に相濟みませんが、一寸お暇を頂きたうおざりまする」

「何處へお出の」

「實は今までお隱し申して居りましたが、本所邊の壽司やの娘と深く云ひ交ましたのがおざつて、所が其の兄に權太と申す惡者がおざりまして、今日中に金を五十兩持つて行つて遣りませんと、其の娘が女郎に賣られまするので、如何にも見て居ることが出來ません、甚だ恐れ入りますが、一ト走り行つて參りますから」

「勘平さん、もう少し嘘を上手に吐つてお出でなさいまし、赤穂ボッと出の國侍に、千本櫻の燒直しで欺かされるやうでは、留守居の女房は勤りません、出

直してお出でなさい」

「いけますまいか」

「いけませんよ」

勘平又もやスゴ〳〵と引返したが、眞逆に一時殺しに殺して行ふといふ譯にも行かず、何うしやうと思つて居る中に冬の日の暮れ易く、はや日も沈んで四邊は宵暗の頃、いよ〳〵堪らなくなつたので又ぞろ勘平宗利、

「伯母さん」

を始めた。けれども伯母なるものも又なか〳〵の者だからいつかな手を引かぬ

「何です」

「一寸お暇を願ひたうおざりまする」

「勘平さん、一寸此處へお出でなさいまし、貴郎今夜に限つて大層家を出たがりますね、昨夜貴郎は溜息を吐いて、寢られなかつたでございませう、そして

刀の下緒を紫の和打に取り變へて居なすつたでせう、私も淺野のお奥を勤めて居られた人に聞きましたが、淺野家の家風として、いよ〳〵自分の大事となる時は、下緒の紐を取り變へるとかいふ話、覺悟をして居なさる樣子といひ今夜の樣子で見ると、赤穗の浪人が徒黨を組んで、本所松坂町の吉良樣へ討入つて内匠頭樣の御無念を晴さうといふお心組みでござんせう、私はテッキリさうと思つて居るのですが……」

「ド、何ういたしまして、そんな事が」

「オホ……、妙に周章なさるのね、だが然うでないとすれば何故そんなに出たがるのです」

「へー」

「へーではありませんよ、貴郎今夜は餘程何うかなすつて居らつしやる、早く床でも取つてお寢みなさいまし、其の中には使ひに行つたお花も歸りませうか

ら」

又失敗つたので今は勘平、猶豫しては居られない、時を移さば一擧の大事、此處は何うでも行かなければと、息を殺して雨戸をコッソリ、ヒラリ庭へ飛んで下りるが早いか塀を乘り越えて通用門の處へ來り、

「一寸願ひまする」

「オ、、是は横川氏か、何御用で」

「唯今花が買物に出でましておざるが、夜更の事とて心配いたし、一寸見てやりたうおざつて……」

「ア、左樣でおざるか、それは〳〵」

いひながらツト開けたる潜は虎の口、是さへ出れば後は一條道の千里一足虎の子走り。

斯くして快擧の一人に參與したといふが。それは兎に角、當時勘平が偶居した

本所林町から程遠からぬ所に、茶の湯の宗匠が居た、此の人何ういふ傳手のあつたものか、足繁く吉良の邸に出入するので、早くも是に目をつけた勘平宗利、しめたと許り此の宗匠の許へそれとなく云ひ入れて、遂に何時しか懇意な間柄となつた。

然るに此の宗匠、茶儀にはなか〳〵巧みであつたが、極々の惡筆であつた爲め何時も〳〵手紙の遣り取りは代書であつた、その故に、勘平も度々其の事を依頼されたが、何時も快く引受けて、言はるゝまゝに其の用を辨じてやつたので、宗匠も、是が眞逆に上野介を狙ふ赤穗の藩士だとは氣がつかないから、二なき者と信頼されて居た。或る日のこと、彼れは例の如く宗匠の家を訪れた、すると宗匠は非常に喜んで、

「イヤ是は〳〵好い時にお出下された、實は唯今、吉良樣からの御狀が參りましたのでな、其の返書を差上げねばならぬのではおざるが、御存じの其の何で

な、ハ……、又々一つ御厄介になりまするで……」

と代書を頼まれた、勘平は吉良樣と聞いたので、思はず胸にドッキリ來たがさり氣なく、

「それはお易い御用、何の御遠慮に及びませうや、兎も角も御狀を拜見仕りませうかな」

と手に取つて披き見れば、思ひきや吉良家々職の手束にて主人事近々麻布の御屋敷に引移られるにつき、來ん十二月の十四日、當邸お名殘の茶會を開かれ、御同僚衆を招かせらるゝによつて、其の席に連り、何かと御饗應の御周旋頼入るとある、サアしめた、此奴は早速内藏介の許へ知らさねばと、胸をドキつかせながらも筆とつて宗匠が返書を認めやつた、とは神ならぬ身の宗匠、勘平の胸の内しるに由なく、又もや一つの使ひを頼みこんだ、彼は頭を搔き〳〵、

「相憎今日は僕どもを他に遣しましたので折角書いて頂いた御返書を屆け呉れ

る人がないで、甚だ困却いたしまするて」

と暗に使ひを勘平に頼みたい口振、勘平是を聞いて何で遁さう、透かさず附入つて、

「それはさぞお困りでおごりませう、私にても宜しくば、一ト走り行つてお屆け申して參りませう」

「イヤそれでは何うも餘り勝手で……」

「何、御遠慮には及びませぬ、遠くもない吉良様のお屋敷、直ぐに屆けて參りませうから」

と、文箱片手に吉良の屋敷へ飛びこんだ、是が神崎與五郎のやうにコツソリ忍びこんだのでは聊か氣がとがめるから充分の偵察も出來ないが、宗匠の返書を持つて居るといふのだから勘平大威張りだ、態と家を間違へたやうな風をして、彼方をウロ〳〵此方をウロ〳〵さんざ屋敷中をウロつき廻つて悉皆様子を調べてし

つた上、これなら宜しと始めて返事を屆けて歸つて來るや、直ぐ其の足で右の段々を石町の内藏介に報告した。そこで内藏介が大高源吾の報告と、今亦知らせて來た勘平の情報とを比べて見るとシックリ事が合つたので、さらばと茲に一擧勃發の火蓋は遂に切れたのである。

是より先、彼は一書を故郷の親友龍田某といふ人の許へ飛ばせた、勿論是を永訣の印にもと思つてしたのである、其の文中、一々事細かに一擧の次第を批評し其の同盟の人々から腰拔武士の姓名人數までも書き上げてある、

一筆致啓上候、其後は打絶、御左右不承申、朝暮御床敷存候、時分柄寒氣甚御座候、其御元貴公彌々御堅固被成御座候哉、承奉存候、私儀七月末より江戸表罷越、只今迄無恙罷在候、其御表滯留仕候中は、萬端御心易得貴意、恭存知候、兼て御存知之通存念之儀も最早一筋に相究まり、死も不日と相覺候、於此世は此書狀限之御暇乞に罷成候て、別而〳〵御殘多

奉存候、日頃は箇様の切におよび候ても、親をわすれ、兄弟知音を忘れ、十人に勝れ、木石の様にて、さる勇士ぞかしと、自慢に存じ候ひしが、不日之命に迫れば、其御地皆様之御事も思ひ出し、毎よりは御名殘おしふ存候、しかし落涙はものゝふの常にて候、最後之働におゐては、唐のはんくわい、筑紫の八郎殿にも劣申まじくと兼而覺悟御座候間、適いさぎよう打死可仕と御推察可被下候、委敷得御意度候へ共、死出のたび一筋に急ぐ身に御座候て、心も闇處、あら〳〵ながら若斯御座候、將又宿所親共儀偏に奉頼候、今度必死人數書付、掛御目候、

大石内藏介　同　主税
吉田忠左衛門　同　澤右衛門
原宗右衛門　片岡源五右衛門
間瀬久太夫　同　孫九郎

小野寺十内　同　幸右衛門
磯貝十郎左衛門　早水藤左衛門
間喜兵衛　同　十次郎
同新六　千馬三郎兵衛
菅谷半之丞　潮田又之丞
近松勘六　大石瀬左衛門
中村勘助　富森助右衛門
赤植源藏　矢田五郎右衛門
奥田兵左衛門　同　小四郎
堀部彌兵衛　同　安兵衛

此安兵衛義丈夫もの也、七月中に打果す覺悟にて、同志をかたらうために赤穂まで七月上旬に罷越武林只七、某に申聞たる者也、

大高源吾　岡島八十右衛門
矢頭右衛門七　貝賀彌左衛門
勝田新左衛門　武林只七
杉野十平次　村松喜兵衛
同　三太夫　倉橋傳助
毛利小平太　岡野金右衛門
茅野和助　不破數右衛門
木村岡右衛門　三村次郎左衛門
矢野伊助　御家足輕　吉右衛門
瀨尾孫左衛門　前原伊助
神崎與五郎

此兩人は商人に身をやつし、敵之屋敷へしのび入、樣子を度々窺、尤内藏

介差圖、今度此者兩人之言を用ゆ、
缺落之者爰に注す、

中村清右衛門　鈴田重八
中村理平次

此三人最前江戸表參着、爰元之取沙汰有之を聞、色を返じ、しきりに恐れ、理平次は去月二十日、清右衛門、重八は同廿九日に夜逃す、比興不及舌

田中貞四郎

去る六日に缺落

小山田庄左衛門

此者十四五日以前宿へ參度申罷出る、いまだ不歸候、樣子不知申候、大形色ありしと見ゆる、只今迄丈夫に相見ゆる者、某共に五十一人、去夏籠城の覺悟之節、臆病を働、悔先否、大學殿善惡を窺樣々申分いたし、

テダテを以、山科内藏介へ參、首を下、手を束、同志之人數に入、又今度之首尾に恐れ、すみやかに逃る大臆病者共を爰に注す、

粕谷勘左衞門　井口忠兵衞
杉浦順右衞門

此者きたなき奴也、當春伐てすて申筈にて御座候處に、手のびにいたし、取逃し候て殘念〳〵、若御參會も候はゞ、此旨御心得可被下候、

右同斷大腰ぬけ

田川九右衞門　酒寄作右衞門
木村孫右衞門　松本新五左衞門
井口半藏　大塚藤兵衞
田中代右衞門　橋本次兵衞
土田三郎右衞門　前野新藏

生瀨十左衞門　三輪喜兵衞
里村伴右衞門　田中序右衞門
梶半左衞門　近藤新五

此内おかしきは土田三郎右衞門、生瀨十左衞門にてとゞめ候、内藏介江戸表被罷越之由聞つけ、能事とおもひて、不日に京都にまゐられ、内藏介右之覺悟を聞屆け、色を失ひ、身ぶるひ被致候て、速に逃る、國にかへり、女房共と相談いたし、又重ねて可參との返答こそ笑止かな〳〵、

是ものどものことは、輕きもの丶事にても候へしが、筆にも言にも不及る者爰に注す、

奥野將監　河村傳兵衞

此兩人申は、いかに人が犬と申ても、死はかなしふ候間、得下り不申と斷申す笑止かな〳〵、

小山源五左衛門　進藤源四郎

此両人いかに死のおしければとて、内蔵介を見捨て可被逃歟、扨もうたてし、

平野半平　同喜八郎

此者逃許か、内蔵介拂物之代金三十兩ぬすみ取、京都を小路隠れす、むさき奴哉〳〵、

岡本二郎左衛門　同三左衛門

此父子奸人也

佐々小左衛門

此父子臆病不及評、

長澤六郎右衛門

此者大臆病不及評、

上島彌助　田中權右衛門

此両人扨も比興、筆にも言にも不被申候、

幸田三左衛門　稲川十郎左衛門

榎戸新助　山上安右衛門

仁平郷右衛門　高谷儀左衛門

多儀太郎左衛門　豊田八太夫

各務八右衛門　陰山宗兵衛

渡部角兵衛　川田八兵衛

久下織右衛門　井子利兵衛

佐藤伊右衛門　同兵右衛門

此者共儀不及評候、右はあら〳〵書付掛御目候、徒然之御慰被成下候以上

霜月　横川勘平宗利　花押

龍田善之允様

人々御中

評し得て遺憾なしである。

斯くて討入の當夜、彼は亂格子の下着羽織の裏金絲大筋を縫ひ入れ、大小の鞘は烏帽子たゝき金の筋入り、長さ三尺二寸、是を帶びて堀部彌兵衞、村松喜兵衞、岡野金右衞門及び貝賀彌左衞門の四人と共に一隊を形づくつて大手の表門より北の方、隣家の本多邸に近い小さな新門の邊りにあつて、一つには敵の逃脫を防ぎ二つには吉良家々中の長屋〳〵の押へに備へ居つた。既にして一黨の諸士、讎家宿直の士と斬合ひ結び合へるの最中となるや、三々五々、敵は此の方面に姿を現はして邸外へ逃れんと企てた、此處に於て互に必死の戰鬪は初つたのである。當時勘平宗利は、是を限りと散々に太刀を揮つて、數人の間に懸合せ美ん事其の數敵を切靡きはしたものゝ、其の身にも亦金創を被つた。

さるほどに十五日の拂曉、一黨四十有七人のものが吉良邸へ亂入、上野介を討取つて、引揚げ來るといふ噂が電光の如く人から人に傳るや、斯くと聞いたる森家の家臣等、取る物も取敢ず門外へ群り出で、其の姿の見ゆるのを今か〳〵と待つて居た、彼の芹澤助右衞門も、勘平が斯樣〳〵だと知らせたものがあつたので扨は左樣かとばかり、駈け出して門外の群集の中から見てある折しも、四十餘人の義徒一同、兜頭巾に身を固め、或は嚴重造りの太刀を帶し、或は半弓小脇に抱へ取り、或は長槍杖に靜々と押し來つた、と其の中に横川勘平、眞黑裝束に兜頭巾を取つて腰につけ、白布でキリ〻と鉢卷し、三尺二寸の大刀を横たへたが、昨宵の手合せに受けたる足傷に、同志の一人の肩を借りながら進み來る、森の家臣等これを見るより、勘平殿が彼處へ見えられたといふのを聞くより、助右衞門はハッと思つて後より延上り〳〵、目を注けて見れば、昨日に變る勘平宗利が其の姿、

「オ、勘平、やつたか」

思はず口を衝いて出た一言に、勘平フツと此方を見れば伯父夫婦がホロ〳〵と涙を滴して居るので、ハツと思ふや態と足の痛もなきかのやう、肩に掛けてゐた手を外し、凛々として歩き出したが、流石心の殘つたものか、ツト後振向いた途端、思はず助右衛門と顔見合せてホロリと滴した一滴、其の儘後をも見ずして過ぎ去つたといふ。斯くて勘平宗利、間、奥田等の人々と共に水野家に引取られて翌年の二月、山中團六の介錯で美事先君の跡を追ふた、時に年三十七、法號を「及常水劍信士」といつて、今に泉岳寺の土を飾つて居る。

赤穂義士〔中巻〕

赤穂義士〔下巻〕

赤穂義士〔下卷〕

小林鶯里著

三村次郎左衛門包常

三村次郎左衛門包常は、常陸國稻田の人、彦左衛門の子である。父の代に始めて赤穂に來たり、淺野家に召抱へられて家臣となつたのである。次郎左衛門は其後を承け、同じく内匠頭に事へ、臺所小役人を勤め、其祿高分限牒にも載せられぬほどの小祿であつたにも拘らず、大義の赴くところ身命をも辭せぬの覺悟が深かつた武士であつた、爲に主家凶變の際の如き、卒先して義盟の列に就き、以て君侯が平生の恩顧に報ひんとしたが、何分にも七石二人扶持といふ極めて小祿の

事ゆゑ、他の同志の人々に充分の信を置かれなかつた。で、會議の度ごとに彼は何時も〳〵出席するが、多くは秘密の相談となると組除にされたのである。其盟書血判の當時、例の通り彼は忠實〳〵しく諸士の間を往復して、頻りと立ち働らいて居たが、やがて盟書が諸士の前に擴げられて、各人たがひに私語きつゝあるところに、次郎左衞門が進み寄るや、急に其の書を掩うて傍に押匿した。是を見るや流石溫厚の次郎左衞門もムッとして色を作し、

「是は方々の爲され方とも覺えませぬ、今日は身の貴賤、祿の高下を論ずべき場合にあらずと豫てのお達し、拙者不肖にして小祿ではおざるが、忠義を存ずるの心底、おさ〳〵貴殿方に劣らうとは存じませぬ、それにも拘らず、唯今の爲され方、チト方々のお身に似合はぬ致され方、近頃以て甚だ心得ませぬことでおざる。是非に今日は拙者奴をも連判に御加へ下されたう御願ひ申す」

と熱心面に溢れての懇願に、一同も成る程と思つて、互に顏見合せた。時しも

次の間に居つた内藏介が是を聞いて、

「三村次郎左衞門の申す所、尤も至極のことでおざる、連判に御加へなされよ」

と命じたので、包常直ちに同盟中の一人となることを得た。これほどであつたから内藏介も深く其の節義に感じ、厚く彼を遇したので、彼も益々粉骨碎身して一擧の爲めに盡瘁したのである。彼は人となり誠實律義、毫も嘘僞を衒ふやうな浮薄の心などなかつた武士である、其の如何に篤實であつたかは、彼が知友の許に寄せた手柬によつて明らかである。

大石内藏介殿巳の四月十六日、遠林寺に御越被成候て、夜七つ時に私儀を御居間へ被召寄、御申被成候は、其方事家中人多き内に、祿輕き者の儀に候處、親より相勤申候厚恩を感じ、必死の志儀承屆、扨々家中に侍も多き、其外御恩澤の者共數多有之候處左樣成儀は不申及、結句身の爲に見苦敷體不及言語候、然處其方忠節ひとへに志深く候事、神以拙者心底も恥敷ほどに存候

存寄之通にも相叶候はゞ、其方儀は何卒惠遣申度由、吳々御申被成候、承
屆、誠に輕き私儀に御座候處、御捨不被成、只今の御意辱次第感候へば、涙
ぐみ御返事も不申及候同五月十八日領内之帳面引渡相濟、只今迄首尾能被
相勤候奉行小役人其外輕き者迄、内藏介殿爲御禮魚類之御料理御申付、相濟申
候て後、侍中迄の御居間にて一人づゝ御禮有之、金子抔被遣候、其外之面々は
書院にて一勢一同に御祝被成候よし、田中清兵衞殿披露之上被申渡候、私儀は
侍並に御居間にて御傍へとくと御呼被成候て、御申候は、其方事一人にて何廉
大勢之世話、その上只今迄晝夜之勤勞一々見屆、於拙者滿足申事に候、何卒
取續候樣に致度候へども只今の拙者事に候間、寸志迄に候、兎角いか樣致し候
てなりとも、取續き見申樣にと御申、御手自金子被下候、右御申聞の趣身に
餘り忝存、直に御禮難申上、間瀨久太夫殿を以て、御禮申上候以上。

三村次郎左衞門

野々村平右衞門殿

斯くて彼れ次郎左衞門包常は、赤穗退去の後、其の妻子を處置して一擧の爲め
活動するに累を及ぼさゞらしめ、而して京都に出で、依然内藏介が幕下にあつて
忠勤を勵んだ。さるほどに期やうやく迫つて十五年の十月となるや、彼は内藏介
の東行に從つて同じく江戸表に出で、時に町人嘉兵衞などゝ稱して、多く敵讐の
動靜に備へて居た。

其の江戸に居た頃の話である、彼に就いて面白い俗傳がある、というのは彼が
吉良家の探偵に從事して居た處から、其の身は襤褸半天を纏ひ薪割に假裝して、
日々松坂町から相生町、さては綠町界隈を徘徊し、大割小割の二挺の斧に薪割
臺を結ひ着けて、

「薪割はよしかな、薪割はよしかな」

で流して歩いた。處が一日、丁度用事あつて神田柳原河岸までやつて來ると、

當時研師として少しは人に知られた竹屋喜平次光延といふ老人があつた。其の店先を次郎左衛門が通ると、

「オイ薪割さん、二三本お願ひ申します」

と呼止めるので、

「畏つた」

と次郎左衛門、木戸口から裏庭へ廻ると、やがて物置から大材ものを出して來て、

「薪割屋さん、是をお頼み申します」

といふので、次郎左衛門、

「承知いたした」

とばかり、其の瘤々だつた大材ものを、臺の處へ立てゝ置いて取り上げた柄の長い大割を大上段に振被るや否や、

「エイッ、ヤッ」

との掛聲もろともスポーン、物の美事に眞二つになつて左右に飛散つた。するとまた一本前のやうに立て掛け置いて、

「エイッ、ヤッ」

剣道の腕前を以て薪を割るのだから、實に美事なものだ、それをば向ふの仕事部屋で、苦い顔をしながら弟子の仕事に世話を焼いて居た喜平次光延、次郎左衛門の割方に思はず見惚れて居ると、此方は包常、薪を立て掛け置いては、

「エイッ、ヤッ」スポーン。

「エイッ、ヤッ」スポーン。

「エイッ、ヤッ」スポーン。

「ウムー」

喜平次老人呻吟り出した。すると又、

「エイッ、ヤッ」スポーン。

「ア、美事〳〵、薪割の名人だなア」

と覺へず口へ出ると、それを聞いた次郎左衞門、

「主人、ほめてはいかぬ、譽められると氣が拔けるから」

と笑ひながらも、

「エイッ、ヤッ」スポーン。

「ウム、實に甘い、上手だ、構はず其處らにあるやつを、片つ端から割つて呉れお前がエイッ、ヤッ、スポーンと割ると、何うも何ともいひやうのない快い心持、溜飲がグーッと下つて胸が清々する、サア構はずやつて呉んな、お前さんの薪を割るのを見ると、醫者にかゝつて藥を飲むよりやア快い心持だ、モット割つて呉れ」

「ハイ、畏つた、エイッ、ヤッ」

「甘い、其處だ」

喜平次光延、次郎左衞門の掛聲に夢中になつて、思はず持つて居た煙管の雁首で弟子の頭をポカーリ、驚いたのは弟子だ、酷い親方があればあるものだと呆れて居る、其の中に薪も宜い加減出來たので、

「サア薪割屋さん、ソコで二三把割つたら此處へ來て一服おやり」

といふので薪割の次郎左衞門も、

「有難うござる、一服やりませう」

と玆で一服二服吸ひつけてスパ〳〵やつて居る。

「薪割屋さん、お前の割方には實に感心したよ、それにお前の割方が一風變つて居るから餘程面白い、これから何うだい、お前の方の都合が宜かつたら毎日今時分來て呉れないか、そして翌くる日の焚く分を〳〵と割つて行けば宜いから」

「ハイ、それは何うも有難いわけで、ナニ都合も何もありやアしない、では明日から毎日上ることにいたさう」

「それぢやア今時分來ての、晝飯を家で上げるから辨當を持たずに來て呉んな」

「有難うござる」

と次郎左衞門禮をいひながら不圖見る氣もなく仕事場の中を見ると、喜平次の弟子が五六人、セッセと長い刀短い刀、いろ〳〵なのを砥石にかけて居る。見ると何といつても元が侍だから堪らない。

「時に失禮ながら、一番右手の方で研いでいらつしやるのは、備前ものでございますかの、あれは斬れるでせうな、次のは相州ものでございますか、新刀らしいが」

などやり出したので、

「ヤー薪割屋さん、上手だな、何うも驚いた、お前さん此方をチト手掛けた事

でもあるかい」

と竹屋の老人不思議に思つて聞く。次郎左衞門も是はしまつたとは思つたが、其處は何氣なく、

「イヤ何ういたして、實は私の家の前に道具屋がありましてな、雨の降る日など遊びに行つては、是が備前ものだとか、是は相州だとか、斯ういふこみの鑪を入れたのは何時代のものだとか、まア門前の小僧で、自然に覺えたのでからもう……」

と逃げやうとしたが、ドッコイ喜平次だつて眼がある、

「なるほど、しかし然うぢやアあるまい、お前さんの樣子を見る所が、今は襤褸半天に身を纏うてこそ居れ、素は立派なお武家さんだらう、俺は人の眼利が自慢の男でな、大概斯うと見込をつけたら外しつこはねへ爺なんで……何うだい驚いたらう、素は確かに武家だ、それに違ひあるまい」

目星をさゝれたので思はず包常ギックリしたが、
「イエ何ういたしまして武家所ぢやアございませぬ、播州赤穂は在の田吾作なんで、兄弟が五十三人あつて、食ふに困つた擧句斯うして江戸へ出て參りましたが、別に田舍ものゝことゝして錢取は知らず、據なくまア斯うやつて薪割をして居るやうな私でハイ」
「冗談いつちやアいけねへ、いくら兄弟が多いつたつて、二十鼠ぢやアあるめへし五十三人なんてあつて堪るものかい、何でもお前さんはお武家に違えねへ」
「イエ、決してそんなものぢやありませんお武家なんて途方もない」
「イヤ、何うしても侍だ、侍に違えねへ、斯うと俺が思込んだからにや決して外れつこはねえんだ」
「五月蠅ッ、それほど迄に聞きたくば、名乘つて聞かせるほどに能つく聞け」
「そりやこそお出でなすつた、多分さう來るだらうと思つて待つて居たんだ、

サア耳を堀じつてお聞き申しやせう」
「宜しい、そも遠き先祖を尋ぬれば、大職冠藤原の朝臣鎌足公の流を汲む淡海公の二十四代の何とかで、何とか〳〵平家の方に名を得たる、侍大將の一人惡七兵衛景清とは拙者のことだ」
「冗談ぢやアねへ、落し話を聞くやうだ、何ぼ何でも景清が、今時なんで薪割になつて居るもんか、まア隱し立てせずにいつて御覽なせえまし、決してお前さんの御迷惑になるやうなことは、憚かりながら此の竹屋喜平次、首にかけたつていはねへ、まア言つて御覽なせえまし」
「イエ、何ういはれても百姓は百姓なんで……」
「さうかい、然う隱すなら强つてとは云はねへ、しかしお前さんの名を何といふんで……」
「私は次郎つていふので」

「それぢやア薪割屋の次郎さんか、マア何でもいゝ、明日から間違えなく來て呉んな頼むよ」

と其處で薪割屋の次郎の次郎左衛門は大きに喜んで、以來毎日〳〵竹屋へやつて來ては、

「エイッ、ヤッ」

スポーン〳〵で薪割をして居たが、何さま心ある武士の彼れ次郎左衛門包常、いよ〳〵といふ時には此の名人に一刀を研がせた上、充分の働きをしやうといふ考へ、とは知るに由ない竹屋の老人、其の割方を見ては子供のやうに喜んで居たが、或る日のこと廻り所でも多かつたか、少しく毎時よりは刻限が遅れてやつて來た次郎左衛門、

「今日は結構なお天氣で……」

「ヤー次郎さんかい、今日は何うして遅くなつたんだい、實はモウ來さうなも

のだと待つて居た所だ、マア一服やつて、又一つ願はふかな」

「ハイ、有難うございます、ナニ少し廻り處があつたものですから、つい遅くなりましたヘイ」

と挨拶しながら向ふを見ると、立てかけてある大きな看板、

「親方、大層立派な看板が出來ましたな」

「ナニ立派といふほどでもないが、削りはよく削つてある」

「なるほど美事なものだ、して親方、これへ何と書くので」

「御刀研上所、脇へ竹屋喜平次光延と書けば宜いので……」

「で、書くのは何誰で」

「別に誰れといふこともないが、よく方々の看板にある、丸い字は書いて貰ひたくないのでね、しかし其樣な事をいつちやアチョックラ書いて呉れる人も見當らないので據ろなく此の先の御家流のお師匠さんにやつて貰ふ積りて、先刻

から小僧に墨を磨らして居る處だ」

「なるほど」

と看板を見詰めて居た次郎左衞門の薪割次郎、當時人に知られた書手で、淺野の家中は勿論、本家安藝守の藩中にも聞えたほどの手を持つて居るといふ腕だから、書きたくなつて手がムヅ〳〵して來た、

「親方、何うでせう此の看板を私に書かせては呉れませんか」

「お前が書く……お前が……」

「何うでせう」

「此の看板へ書かうといふのかい、フム、だからお前さんは他に本名があらうと何時かも私がいつたんだ、本當に何ていふんだい薪割屋さん、お前さんの本名は」

「本名は惡七兵衞景清でさア、其の他にやア薪割屋の次郎」

「オイ〳〵落し話ぢやアねへ、しかし書きてえといふならやつて見な」

「宜うがすかい、やらせて下さるんで」

久し振りに大きなものが書けると喜んだ次郎左衞門、いづれ近い中に自分は死ぬ身だ、何うせ死ぬなら何か一つ此の世に遺して置きたいと思つたが是を幸ひ、此の看板に自分の腕を振つて置かふと悅んだ彼は、ツカ〳〵と仕事部屋に上りこんで其の看板を手許に引き寄せ、ピタリ腰を下してヂッと構へた其の體の樣子、襤褸半天こそ身につけては居れ、何となく犯し難い姿に、仕事をして居た喜平次の弟子達も驚いた。其の中に小僧が大きな硯を持つて來たので、

「親方、表は楷書で書いて、裏は草書にしませうかね」

「宜からう、しかし表の楷書は宜いが、裏を雙紙にしないやうに、淸書でやつて呉んな」

「洒落をいつてらア、しかし宜うがすね書きますせ」

と、キッと看板に目を注いで筆にタップリと墨汁を含ませた次郎左衛門、墨痕鮮やかに御刀研上所と書いた其の筆の美事さ、脇へ持つてつて竹屋喜平次光延と書き終つて、ヒラリと反した裏の草書、一筆書きにサラ〳〵サッと走らした所、實に活々して見るからに心持の宜い出來、

「親方どうでございませう、是で御尠辨が出來ますれば、お店に掛けて置いて貰ひたい、いけなければ削らしてお家流のお師匠さんの所へ……」

「イヤどうして〳〵、甘い、實に甘い、明き盲目の私が見ても字が動いて出さうな鹽梅、眞たく美事なものだ」

と喜平次老人、ホク〳〵してゐる、側に見て居た四五人の弟子共も、

「どうだい甘いぢやアねへか」

「ウム、眞つたく甘い、あの薪割めアンなに甘く書かねいでも宜さゝうなものだにナア」

「然うよ、襤褸半天を着て居やアがつて、アンなに甘く書くにやア及ばねへ」

こんな入らざる世話の心配をしてゐるのもあれば、

「彼奴、字をアンなに甘く書く癖に、何で薪割なんぞして居るんだらう」

「ナニ彼奴、屹度お目出度ほうなんだらうお人好しに違ひねへ」

などゝヒソ〳〵惡口をいつてるのもある。次郎左衛門だとて耳に這入らないではないが、燕雀何ぞ大鵬の志しを知らんやで濟したもの。やがてコソ〳〵に暇を告げて其の日は立歸つた。そこで其の翌日から件の看板を表にかけた處、間もなくやつて來た一人の侍、是は何といふ人が書かれたものか是非共流名を承りたい、又眞筆の手本を申受けたいなどゝ尋ねる、それが次第に殖えて遂には日に三四人を數へるやうになつたので、サア竹屋の老人が威張り出した。

「憚んながら俺の所の看板は日本一だ、此方が楷書で此方が草書といふんで」

誰が侍で楷書と草書の區別を知らない者があるものぢやアない、兎に角それが

江戸に名高い看板になつた。是が後に村松三太夫の柱瑕と共に、竹屋の秘藏物になつたといふ俗傳がある。

茲に討入當時、彼れ次郎左衛門包常は、淺黄の下着に黑小袖紅表黑羽織とも裏筋金入りの小手脇當をつけて、三尺有餘の强刀を腰にし、吉良家の裏門にと立向つた。此の門のさまで堅牢でないことは、日頃から見分めてあつたので、

「東組に後れるな、それ打破れ」

といふ號令の下から、彼は杉野十平次次房と共々、

「承る」

と應じながら、大槌を揮つて鋭々聲に打込めば、もとより大力の勇士等が、精神こらして下した槌に、扉は忽ち四離滅裂、得たりとばかり飛び入つたる次郎左衛門は、其の儘後をも見ずして邸内奥深く躍り進んで行く折しも、吉良家宿直の侍一人、切先鋭く其の面前に立ち塞つた、と隙間もなく驅け合せたる彼は、二

太刀三太刀合すと見るより早く、チヤリーリ引外して置いてその腰車を丁と斬り返す刀に胸元深く貫いたる其の働き、水際だつて衆中に見え渡つた。

斯くて首尾よく昔年の怨を解け行く雪のそれと共に霽らし終ふるや、彼は水野邸に九人の同志の士と同じく引取られて、茲に三十七歳を此の世の名殘り、稲垣佐介の介錯によつて美事及珊瑚劍信士の法號と化したのである。

潮田　又之丞高敎

潮田又之丞高敎が家は、世々赤穂の藩士であつた。又之丞の代になつて、馬廻に列し、二百石を食んで、故内匠頭長矩侯に事へて居たが、同時に國繪圖奉行と加東加西兩郡の郡奉行をも兼務して居た。彼れは早くよりして、彼の大石内藏介や、同苗瀨右衛門等と共に、當時關西きつての劍客、讃州高松の奥村無我の門に入つて、斯道の蘊奥を極めた、從つてなか〳〵の遣手であつた。

彼についても、亦一の俗傳がある、よく小話や講談などにいはれてあるものだが、故内匠頭がまだ在世の頃、一日梅見にとて騎馬で唯一人、堀部彌兵衛を連れてお出ましになつた。處が此の彌兵衛金丸、なか〳〵の馬術自慢なので、いろ〳〵と其れについての講釋を道々説き初めた。然るに内匠頭も亦それに敗けぬ天狗なので、二人の間は何時か議論の花が咲き出した。主從隔てぬ間柄の二人、馬の上で互に喋舌り散らして居つたが、やがて彌兵衛が内匠頭に向ひ、

「殿が如何やうに仰せられましても、俗にいふ大名乘り、御指南番が、上樣は御上達なされたと申上ぐれば、それを實くと思し召されまするやうな、所謂大名藝では、甚だ以つて……」

「何ぢやと、大名藝だ」

「左樣で、其處へ參ると斯く申す彌兵衛の如きは、實地に就いて練習仕りまして鍛へに鍛へた腕前、殿に優るとも、ゆめ劣らうとは存じませぬ」

「コラ〳〵彌兵衛、天狗は好い加減に止めい、其方が假令何と申さうも、論より證據といふことがある、是より彼處の梅林まで互に駈け競べをした上で、兎角の自慢をせい」

「宜しうおざりまする」

「若も其方が萬一予に乘り勝つならば、此の印籠を褒美として其方に遣はす」

「それは〳〵、彌兵衛身にとりまして有難く存じまする」

「禮ばかり先に申して、其の鼻を折られまいぞよ、もしも此の長矩に及ばんければ、以來予が面前に於て、決して一言たりとも馬術の自慢はさせんぞ、よろしいか」

「畏りました」

と、天狗同志が駈けつくらを初めた。ハイヨー〳〵ト、〳〵と口取も連れず、主從兩名幕地に砂煙りを揚げて馬を飛ばして行く。根が利かぬ氣の内匠頭、

「彌兵衛、恐れ入つた方がよからうぞ」
「イヤ何う仕りまして、上こそ途中に於ていつそ御印籠を下し置かれました方が宜しからうと存じまする、彌兵衛めの馬は御覽じませ、これ斯樣に生きて居りまする」
「馬鹿を申せ、予のぢやとて生きて居るぞ何うだ」
と互に勝手な事をいひ合つて居る。
「殿、私めは一足前に參着仕り、御待受け申上げるでおざれば、恐れながら殿にはさのみお急ぎなうボツ〳〵とお出で遊せ」
彌兵衛の馬が、内匠頭のより少し前へ出ると、鼻たか〳〵と斯ういふ。すると負けぬ氣性の内匠頭も亦、
「默らんか彌兵衛め、僅かに先へ出でたりと申して……よし其の義ならば目に物見せてくれん、覺え居れ」

といふ中に、此度は内匠頭の方が少し前へ出る、と待ち構へて居た長矩、
「コリヤ彌兵衛め、其の高慢の鼻を如何いたした、降參せい」
「イヽヤ、殿のお言葉なればとて、彌兵衛も武士、降參などは決していたし申さぬ」
と双方負けず劣らずに云ひ合つて、トツトツ〳〵と馬を駈けさせて居る。然るに何うしたことか、やがて内匠頭の馬が、一聲高く嘶くや否や、棒立に立ち上つたかと思うと、内匠頭を背に乘せたまゝ、暴れに暴れて馳り出したから、往來の者の驚きといつたら、ワーツワツといつて逃げ廻る、馬はそれに益々氣を得て、ひた走りに走つて〳〵走り行くので、流石の殿も今は一生懸命、鬣にシツカリと捉つて、其の體を馬の脊にくツつけるやうにしながら、唯々落ちないやう〳〵と齒噛みついて居る。と此の時、年の頃やうやく十四五になる一人の男の子が、眼病の老人の手を引きながら、

「伯父さん、危ないよ、宜いかい、大丈夫かい」
「ア、大丈夫だよ、お前が斯うして連れてつて呉れるので大安心さ、それにしても又坊、こゝは一體何處だい」
「此處はね、あの梅林へ處く往還だよ」
「オ、然うかい、それは存外早かつた、慣れたことなら杖にすがれば宜いのだけれど何うも俄盲目の悲しさには、何處が何うやらサッパリ見當がつかず、お前ばつかりが頼みぢや、それにつけてもお前のお父さん、思ひ出すのもお氣の毒なくらゐ、もとは立派なお武士でありながら、思はぬ不幸に主家御浪人、今のお母さんとお前と三人で、指折り數ふれば十年ばかりも前のこと、あの不動堂へ一宿したのが縁となり、五六年の間も堂守をしてお居でゝあつたが、不圖したことから武士の意氣地、他國の渡り侍を三人までも斬り捨てたほどの、腕も達者な得難い御人、地頭様も是非にといつて、召抱へやうとなされたが、最

早二君には事へませんと斷然お斷をいつたくらゐ、實に見上げたものだつたが壽命は是非のないもの間もなく風邪の心地といつたのが原因となり、遂々死去なられてからといふもの、それや是れやが續き續いての不幸で、お母さんが長の病ひ、それを厭はず孝行するお前の心掛、晝は斯うして人の手引や使ひ廻り夜は夜で又看病藥の世話、僅か十四や十五のお前によくマア出來たものぢや、村中でお前を褒めぬ者は一人もありはせぬ、親御様のお教育が好いから、たとへ貧乏暮しをして居つたればとて、あの又坊の孝行ぶり感心なものぢやとな、本當にさういつて評判なもの」
と咄し〳〵來かゝる。そこへ前にいつた内匠頭の荒馬が荒れて來たのだから堪らない、馬上の内頭匠も今は手綱を引き締めるどころか、たゞ、
「危ない、どけよッ」
といふばかり、後につき從つて來た彌兵衞も何うすることも出來ない、